
朱雀幻想記 ~流~

作者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

朱雀幻想記 ～流～

【Nコード】

N3615I

【作者名】

作者

【あらすじ】

人を助けたら死に掛けた…気がついたら永遠の命見たいのもらって過去に飛ばされる……別に異世界とかに飛ばされたわけじゃないぜ。そんでもって朱雀のところから俺のところによこされた式の炎歌を従者として

旅に出ることになった。すべては理想のために……

第一話 終わり掛けに始まりで（前書き）

プロローグ的な話ですが何かプロローグだとかんかんって感じで…

第一話 終わり掛けに始まりで

(な、何だ……なんか見えるものすべてが赤い……)

とある青年が倒れていた……青年は血にまみれていた……

青年の名前は『東龍 覚』大手グループである朱雀グループの
跡取りの息子である……成人したら祖父の養子になる予定であった
……

(確か……男の子を助けようとして……んあ、ああ……それで死に
かけなのか……)

青年は何か嬉しそうな顔をしていた……

(へへっ……死ぬのに笑ってるぜ……最後に英雄になれたか……)

『面白い考えを持つ奴もいたものだ……朱雀と言う苗字をもつ一族
の人間に……』

(なんだ……頭の中に声が聞こえる……死に掛けの幻聴ってやつか
なあ……)

『まあ、いい……お前はやっぱり面白いからなあ……無限の命をや
ろう……』

(無限の命?……俺は……英雄に!)

『はっはっは!面白いなあ……やっぱり……お前は……無限の命を
得れる時いてそう考えるか』

(でも命だけじゃ、英雄には……力もないと……)

『それもそうだな、朱雀の力……半分も分けてやう……大サービスだ』

(朱雀の……力……つまりは炎とかの力のことか……)

『ふ、朱雀と言ったら人間はそれしか考えんのな……いくつも時代
がすぎたのにな』

(まあ、そうだな……てか俺死に掛けなのになんでこんなに悠長に話してられるんだろうか)

『すべては朱雀の力だ』(そうなのか……まあ、信じるしかないけど)

『うむ、ついでだ……お前を過去に送ってやるよ……英雄』

(過去？何故……)

『それは……まあ……お前のためさ……無限の命……そして朱雀の力……活かすといい』

(ちょっと待て……なぜ過去に……)

『すべては理想郷誕生のために……かつこいいなあ、俺……』

「ん、あ……ここはどこだ？確か俺は男の子を助けて事故にあつて……」

『過去に飛ばされたんスよ、過去に』

「ウエ！誰だ？」

『あ、どもツス。朱雀様の命によりあなたの式になりました炎歌っス』

「式？なんだそりゃ？手がそついや朱雀に過去に飛ばされたんだっけ」

『そういうことツス。俺っちはあなたのサポートをするためにいるわけっス』

「ふむ……てか俺はこれからどうしていけばいいのか……」

『だから俺っちがいるんすよ』

「まあ、そうだな……じゃなきゃ煩いだけだしな……」

『ひどいっス……』

「んで、ここはどこのなさ？」 『奈良時代ですよ』
「奈良時代ねえ……」 『かぐや姫がいるらしいっすよー！』
「かぐや姫だあ？あんなの御伽話じゃねえのか？」
『でもいるって……』 「ふむ……なら行ってみるっきゃないぜー！」
『あっ、待ってください〜』

死なない人間とその従者の旅が始まった…

第二話 輝夜フラグを知らぬ間に立てる男

「かぐや姫とは一体どんな人物なんだろうなあ……………」

『俺っちも式として生まれたばかりなので見た事ないっスね』

「ふむ……………」

（なよ竹のかぐや姫……………空想上の人物だとばかり思っていたが……………）

覚は歩きながら御伽噺のかぐや姫のことを考えていた。

「ここがかの有名な翁の家か……………しかし人が多いなあ……………」

かぐや姫がいるという家に覚たちは到着した。

予想よりは小さな家であった。

入り口の人ごみは激しい様子である。

「かぐや姫に求婚に来てる奴らか……………確か全部けられるんだっけか？」

『みんな無理難題で追い返されるんすよ』

「そうだったな」

そう言いながら顎に覚は手を当てる。

（しかし、かぐや姫を近くでじかに見てみたいものだけ……………）

『そうですぜ、兄貴。こういう時こそ朱雀の力ですぜ！』

炎歌が羽を羽ばたかかせ叫ぶ。

「朱雀の力……………え、なに？火炎で煩い奴らを……………」

『朱雀の力はそういうもんじゃないですぜえ！火炎とかじゃなくて

「ですわねえ！」

炎歌は怒鳴りながら覚の勘違いに指摘する。

「へ、へえ……よ、よくわかんねえべ……」

あきれた顔をしながら覚はそう答えた。

ちなみに方言などはよくわからず使っている。

「そつつすか……今、俺がちがしてる視覚死角とかもあるんすよ」

「視覚死角……くっ、洒落みたいだな……」

覚は笑いをこらえている。

「朱雀様つてば、洒落がすきつすからねえ」

「まあ、つまりは見えなくなると」

「普通の人間にはつつすがね」

炎歌は覚の言葉にそう付け加える。

「ふむ……普通な人間以外には見えちまうのか？」

「ん、まあ、普通な人間以外なんて見た事ないすからわからないっ
ス」

（そうか、こいつは俺専用で作られたばかりだったな……）

なんやかんやで視覚死角を使って家の中に入り込む覚達。

普通の人間には見えないうつのに、覚は隠れながら慎重に進んでいく。

「何で見えないのに隠れて移動するんすか？」

「いざという時の為だ。もし効果がない奴がいたら……」

覚は石橋をたたいて渡るほどの慎重タイプなのである。
ある一定のフラグがたつと暴走するが。

「しかし大勢人がいてかぐや姫が見れないぜ……」
『隠れてるからすよ』

炎歌は覚に対して呆れたように言う。

「もう少しここに隠れていてみるかな……」
『まじっすか……』

だが覚は慎重だから炎歌のいうことも聞かず隠れながら近づくのでかぐや姫を見る事ができない。

【数時間後：庭】

「お、なんかぞろぞろとしていた人だかりが減っていくぞ」
「時間も時間ですし、今回はあきらめたんじゃないですかい」

かぐや姫のいるらしき部屋から人がいなくなったのを見て覚は近づいていく。

『もう隠れなくてもいいんじゃないっすか？』
「いやいや、ここはばれない様に……」

《ガサツ》

『「あ」』

覚達は茂みで音を立ててしまった。

「誰かいるの!？」

その音を庭に来ていたかぐや姫に聞かれてしまった。さらにかぐや姫は覚達の方をじつと見ている。

「え、なあ、炎歌……俺ら見えてないよな……凄く見られてる気がする」

『きつと音に反応しただけっすよ……』

輝夜がこつちをじつと見つめているため覚は少しあわてたそしてそれに対して安心するように炎歌は覚を落ちつかせる

「え、そうだな……しかしかぐや姫の実態はこんなだったか……」
「誰よ……あんた達」

そう言いながらかぐや姫が近づいてくる。

「おい炎歌、見えてるんじゃないのか……おい」
『んな……普通の人間には見えないはずなのに……』

覚は炎歌の頭を掴み軽く頭を殴り続けている。
炎歌はそれを気にしていないようでありかなり驚いている。

「見てしまったのね……私の真の姿を……今までのすべてが台無し

に……」

（ウエ……ウエイ……何この状況……てか服とか見られたら俺もやばい……）

覚の服装はこの時代のものではないしかなり不振がられるかも知れないと言う不安が
覚の心を煽っていた

「そうだ、あなた名前は？」

「俺は……東龍 覚……まあ18歳かな……」

確実に今は18歳である。

「覚ね……そう、あなた私の遊び相手になってくれない？ なるならだれにもあなた達のことは言わないわ」

「え、かぐや姫と……遊ぶ？」

覚は首をかしげる。

「そう、誰もが求婚を求める私と……」

（べつに俺的にかぐや姫は告白したいと思うタイプではないな……しかし……ここは問題が起きないように……遊ぶ事にしてやるかな……）

覚は何かものすごく余計な事を考えながらだが安心し始めていた。

「よし……んじゃあ、遊ぶか？」

「よし、それじゃあ遊びましょう。後私のことは輝夜って呼んでね」「わあった、輝夜……よろしくな！」

「ええ」

『あれ、俺っち忘れられてる……』

その後、輝夜の地獄の遊びに付き合わされてしまっ覚達であった……

続く

第三話 輝夜との別れと幻想への旅の始まり

「しかしまあ……裏庭生活にも慣れてしまったなあ」

『輝夜の姉さんと遊ぶためですし、家もあるわけねえですから……』

「でも朝に起きるとさあ、背中いてえんだよなあ……」

『痛そうすねえ』

あの日よりかなりの期間が経過した。

かぐや姫こと輝夜と毎日のように遊ぶようになった。

視覚死角により他人からは姿が見えないので庭にテントで生活している。(テントも見えない)

食い物は炎歌が取って来てくれている……

「しかしまあ、俺の料理の腕もさらにランクアップでプロ並みになってきたな」

『調味料は俺っち、材料さえあれば作れますからね』

元々覚の料理の腕はプロも唸るほどのものであったがここでの生活が始まってからは更に腕を上げていた。料理できるものもドンドン増えていった。

「しかし、このごろ輝夜がおとなしくなってきたなあ……」

『そうっすねえ……』

そう言いながら覚は顎に手を当てる。

「いよいよ月に帰るのかも知れんな……」

『おお！ あの時間の止まつてる隙について奴ですね！』

炎歌が翼を羽ばたかせる。
覚はうつとおしそうにする。

「そうかあ……お別れかあ……仲良くなって長いのになあ……」
『輝夜の姉さんの協力の下にはれることなくここで生活もできましてね』

「色々食材用意もしてくれたしな」
『うつす』

炎歌が用意できなかった食材をいくつか輝夜が用意してくれた。
間抜けな男達を利用すればいろいろと簡単に手に入るものである。

（裏庭生活もかなりなれたが……いよいよ旅に出る事になるのか……
旅に……
輝夜と楽しく遊んで楽しい日々だったぜ……別れはさびしいが……）

「輝夜が帰ればここにいない意味もない……自由気ままな旅に出るか……」

『自由気まま……いいつすねえ』

「ああ……自由な旅……」

（旅に行きたいという気持ちもあるが……輝夜とお別れもさびしいな）

覚は少しさびしそうな顔をしながら旅支度をはじめた。
そうしていると誰かが近づいてきた。

「覚……いる？」

「ん、あ……輝夜か……いるぜ……」

（神妙な顔だなあいよいよって所か……）

覚も少し真剣な顔になる。

「あの……話さなきゃいけないことがあるんだけど……」

「なんだ？」

「あの……ね……」

一向に内容を言い始める気配はない。

(こりゃ駄目だな……輝夜……)

「実はね……」

(じゃあないな……)

そう言っただけで覚は輝夜が話しだす前に話しだした。

「なあ、輝夜：先に俺が言っただけいいか？」

「え、あ、うん。」

輝夜は少しすくむ。

「俺旅に出るわ」

「え？」

輝夜は凄く驚いたような顔をしている。

その顔を見て少し笑いながら覚は話を続ける。

「違う所にも行くことと思ってな……このことは違う所へ……」

「え……そう……なの？」

「ああ、いずれは帰ってくるつもりだ……いずれ」

「そうなん……へえ、そうなの！お土産話とか色々待ってるわよ！」
「ああ、楽しみに待っていてくれよ。じゃあな、輝夜。またな」
「うん、またね、覚」
「ああ」

そう言っただけで覚は荷物を背負い家の外に向かった。

『あ、兄貴！待っててくださいえ！』

（俺が旅に出るって言うてからいつもの輝夜に戻ったな……）

ふ、俺の好きな輝夜はそれだけさ……好きって言うても友達としてだかな

あいつは最高の友達だからな……あいつの気持ちはどうか知らんがな……

あいつらも俺への告白とか突然すぎたしな……いきなりすぎるって言う感じだったし

まあ、どうせ月に帰ったらもう会う事もないだろう……さよならだな……）

『よかつたんですか兄貴？』

「いいんだよ、これでさ」

（俺の旅……これから始まる旅……よし、頑張るぞ！）

覚は笑いながら日の見える方向に歩いていった……

旅の物語へ続く

第四話 会話した村人は全員男だったはず

旅に出て幾日……覚はかぐや姫が月に帰ったという話を聞いた……

(どうやら輝夜は月に帰ったようだな、さびしい限りだ……
かぐや姫といえば昔、週刊ストーリー何とかで見た話だと
罪を犯して地球に送られたみたいなお話があったなあ……
でも実際輝夜はいい奴だったし……伝承は伝承だな……)

そう言っただけは顔をあげる。
すると炎歌が帰ってきた。

「輝夜は帰ったかあ……聞き込みサンキューな、炎歌」
『どもつす。あ、面白い話すつけど、藤原不比等の娘が帝の薬を盗んだという話も聞きましたぜ』
「物騒な話しだなあ……てか帝の薬て……伝承にある不死の薬か」
(不老不死の人間か……ところで俺はどうなんかよくわからんけど……)

その時富士山の名前ってどうなるんだろうと覚はかなり真剣に考えた。
しかし考えた内容がくだらなく感じたので盗んだ犯人のことを考えた。

「不死の人間かあ……あってみてえなあ、藤原の娘に……」
『なら、旅の目的は藤原の娘を探すにきまりつスね』
「そうだな、まあそれを今の目的の一つにしてみつか！」

こうして旅の目的も増えて覚達は旅に出る事にした……

「不死山の付近で事件があった……富士山か」

『静岡っすか……』

(しかし山の名前……ああっもう！気にせんで行くぞ！)

覚の顔が少し険しくなったので炎歌は少し側から離れた。

しかし炎歌が離れたのを気づかず覚は話しはじめた。

「えーと、そこらへんから見えるんだっけな……記憶では……」

『おれっちの記憶も何かあやふやッス……』

炎歌は困ったように羽を羽ばたかせる。

「朱雀の知識って一体何なんだろうな……」

(朱雀の力の使い方……ってのもよくわからんがいろいろできるけど……)

朱雀も半分なんて中途半端に力くれちゃってさあ……

いや、伝説上の四聖獣の一人の力の半分だからな……

きっと俺がうまく使えてないだけですごい力があるに違いない。

絶対そうだ。そっぴゃこのごろ空を飛べるようになったなあ……)

覚は深く考えるが最後のほうで勝手に納得して解決した。

実際には解決していない。

「しかし、空を飛んでると視覚死角が使えないってのは不便だなあ

……」

『力の使い方がうまくできてないんすよ、兄貴は』
「力の加減……力って使うときとかあんま……」

「ギヤアアアア」

どこかから叫び声が聞こえる。

「ん、あ……妖怪？」

『おお、初めてみたっス！』

「妖怪って化物みたいな奴なのかな……」

なお襲われていたらしき人物はもう見当たらない。

『いや、違うのもいるっていう知識はあるっス』

「へえ〜」

「ギヤアオオオオ」

そうしているうちに覚めがけて走ってきた。

「実験台かなこいつ……」

『ほお……実験台すか……』

「よし、いでよ、火炎！」

すると手から火炎が出現し、目の前にいる妖怪の周りを囲み燃える
そして妖怪は燃え上がる……

(ていうか……やっぱり炎しか力思いつかんかった)

「ありゃ、もう消し炭か……朱雀の力の少ししか使っていないのになあ

……」

『さすがつスよね』

「悪い妖怪を退治するのは気持ちがいいな……」

覚は少し過去のことを思い出した……

(ふ……… 下等な妖怪め……… 英雄の俺を殺そうとした自分を恨め)

覚は、自分の力の強さを見て、小さな子供のようなことを考えていた。

それも過去のことを思い出したためだ。

「ふははは、悪い妖怪退治は楽しいなあ」

『はっはっは、そうですね』

そして村を見つけ訪れてみる……

服は力で作ったので時代に合った服装だ。

「なんだか人だかりがあるなあ……はてさて何があるのやら……」

覚はなにやらわくわくしながら人だかりに近づいていった

「さて何だ……んあ！？女の子がつかまっている!？」

「ちげえの旅の人、妖怪だよ、妖怪」「あの女の子が？」

「ああ、人の心を読んでばらすんだよ。」「それは恐ろしい……」

「ああ、俺が他の女と子供作った事をばらしたんだ。」

「ふむ……む?」「俺も彼氏がいるのをばらされたんだよ……」

「俺なんて親戚殺して財産を手に入れる話を……」

(この村人は何なんだ……… 悪そうな奴らしかいないじゃないか………
というか、つかまっているらしき妖怪が不憫だ………)

という訳で、視覚死角により…ばれることなく助ける事に成功した

「さて、お二人さんよ……」「どうもありがとうございます……」

「ふむ、ちなみに君達を助けた英雄の俺の名前は……」

「えーと、あれ？」「どした？」「いえ……あの……」

「ふむ……とりあえず俺の名前は覚だ」「そうですね……」

「ふむう……なるほどな心が読めんかったか」「はい、そうなんです……不思議です」

(人間の心を読む妖怪が俺の心を読めないか…)

覚は少し朱雀の力について考えた……がすぐに考えるのをやめた
考えるだけ無駄だと思ったからだ

「ふむ、まあいいか……さて妖怪だからどうなるかわかんないが大
きくなったら恩を返せよ」

「あら、大胆な発言ですね」「ふ、ま、言うだけならタダさ」

「面白い人ですね……あ、私の名前は古明地さとりです」

「私は古明地こいし」「ふむ、やはり姉妹だったか……なら将来は
姉妹……」

『兄貴……』「あ、なに……まあ、いつかの話だ……」

何かやばい事を覚は言うところであった……

「ふふ……」「笑われちゃったか」「本当に面白い人ですね」

「ふ、人間て言うのは、弱い所を隠すためにこうなるものなのさ」

「ふっん、そうなんだ」「なっとくしてくれるか」

「だって、お兄ちゃんの話は信じられるもん」
「お、お兄ちゃん!?」「あらあら、まあまあ……………」
『さとりの姉さんなんか、おばさ、ムグッ。』

くちばしをさとりによって掴まれる炎歌

(お兄ちゃんとか聞くと……………くつ美鈴……………)
「ん、あ……………とにかく、もう捕まらねえようにに注意して生活するんだぜ」

「はい、では……………覚さん。ありがとうございました」
「またね、お兄ちゃん」「ん、またな……………古明地姉妹……………」

そして去っていく古明地姉妹……………

『兄貴、あの二人って生まれてどれくらいすかね……………』
「え、俺は約20年間しか生きてないし……………あいつらよりは多分少ない……………」

『そつつすよねえ……………』「お兄ちゃんね……………」
(春香……………美鈴……………水穂……………)

そして覚の旅は続く

「はあ、月がきれいだなあ……………」『つつす』

第四話 会話した村人は全員男だったはず（後書き）

ここででてくる美鈴はみすずと読む作者別作品のキャラクターです

第五話 泳げない河童、そして宣伝

(旅を始めてかれこれ幾年かたった……藤原不比等の娘が一向に見つからない)

長く旅をしすぎた気もする……料理の腕が天下一になったと思う
それになんか歳をとらない……老化しない……20くらいの外見から老けない

まあ、無限の命だしなあ……体が老化して朽ちたらどうなるんだ
ろうか……

精神だけがこの世界に残ったり……朱雀から連想で火の鳥を思い
ついちまった)

「うおおお、出会いがない楽しくないつまんない！」

『古明地姉妹と別れてから特に何もなかったすからね』

「不比等の娘も移動し続けてるらしく見つからないしよお……」

『料理を作ったりとかそんなくらいですもんね』

「行く先々の村の人に神様と呼ばれちまったな」

『兄貴に勝てるものはこの世にいませんよ』「ふむ……」

てか、料理で世界とつても嬉しくはないんだよなあ……

いや、昔から俺は料理がうまいといわれてたけどさ

俺は人を守るような人になりたかったんだが……

「困ってる人とかいないかなあ……」『いない方がいいんすよ』

「助けてえー」「あれ、何か助けを求める声が……」『タイミン
グが……』

川の近くから……いや、あつちには滝じゃないか！

「やべえ、急がないと！」 『まっつてくだせえ、兄貴』

そして滝に行く……

「たすけてえ〜」「か、河童か？」 『河童つすね。』

「見た目は意外と人間にちか……じゃなくて助けんとな」 『ウィツ

ス！』

「うっ、うわああああ！」 「落ちたああああ！ならば、ぴよーん
！」

すごいスピードで空を飛び、滝つぼに落ちかけていた河童の少年を
助ける

「大丈夫か少年？」 「え……に、人間？て言うか俺は今落ちて……
あれ！？」

「まあ、空を飛んだりいろいろしとるがおれはあ人間だぞ、少年」

「す、すごいなあ……人間なのに……」 「ふむ、いい気分だ」

（すごいと言われるのも人……いや、妖怪を助けるのも気分がい
い……）

覚は凄く気分がいいのかその場をぐるぐる回っていた

その後近くの場所に覚は降りた

「あ、ありがとう人間」「俺の名前は覚だよ、覚」

「おう、俺の名前は河城 かけるって言うんだ、よろしく覚」

「ああ、よろしくな、かける……てかなんであんな事になってたん

だ？」

「はは、実は泳ぎの練習しててさ……仲間の中で俺だけ泳げなくて……河童なのにさ」

「河童って水中で息できるんじゃないのか？」

「え、いや、その……息できるのと泳げるのでは違うんだよ……」

「そっか、河童も大変だな」「ああ、大変なんだ……」

「ふむ、なら俺が特訓してやろう」「え？」

「これでも俺は泳ぎがうまいほうなんだぜ。教えてやるよ」

「おっ、おお！ありがとう！覚ってすごく優しい人間だな！」

「はっははは、よせやい」「兄貴……調子に乗りやすいなあ……」

その後、覚による泳ぎ訓練は数ヶ月続き、仲良くなり……好きな子の話をしたりしていた……

「ははっ、お前そのこのことが好きなのか」「ああ、そうなんだよ」

「まあ、頑張れよ……」「覚はいないのか？好きな奴……」

「……好きだって言ってくれた奴はいたけど……好きな奴はいない……よ」

「そうなのか、覚もいい相手が見つかるといいな」「ああ……」

（少し昔を思い出しまつたなあ……いや、未来で過去で……わからん……）

死にかける前の話……思い出すと切なくなる話……

そう、桜達との思い出……は作者別小説にて連載中……

ああ、連載中なのにもう続編書いちゃってるな俺

「さて、お前も結構泳ぎがうまくなったなあ……」「おかげさまであれからさらにいくつかの月日が過ぎていた……」

「もう俺が教える事は何もない、さらばだ河童の少年、河城 かけるよ」

「え、そんな……せつかく友達になったのに……お別れなんて……」「俺も再び旅に出たいしな……まあ……何年かしたらまたここに来るよ」

「……わかったよ……お別れだな、覚」「ああ、あばよ」「またあおうな!」「ああ……絶対にまたここだな」

滝近くの川原でのわかれ……それは……未来への布石だった……

幻想への旅は続く

『俺たちほとんど出番なかったっす!』

鳥だからね

次回に続く

第五話 泳げない河童、そして宣伝（後書き）

河童少年のかけるは東方キャラの誰かの家族です、本人まだいないけど

まあ、いろいろな意味でお楽しみに…

第六話 朱雀ビームの元ネタは光の御子ビーム

河童少年 河城 かける と別れ、再び不比等の娘を探す覚達……
あてもなくさまよい、朱雀流料理師範と言う称号が
人々からつけられるほどに料理を作るのがうまくなっていた……
そして、弟子にしてくれと言う少年がいたので料理の修行を始め
そしていくつかの月日がたった…

「俺ね、君に2代目朱雀流師範代の称号挙げるよ」

「あ、ありがとうございます」「うむ、頑張れよ」

このあと、この少年は朱雀流からとった朱雀と言う苗字を与えられる
それが朱雀流の始まりだと言われている……

「しかし……ここ数年暇しないなあ……」「弟子いっぱいですもん
ね」

(料理に水泳……これって英雄できてるのかなあ)

自分の想像図の英雄とはかけ離れていると悩んだような顔をした

「英雄って言われるような事したいなあ」「兄貴、あれ見てくだせ
え」

「おお、紫の服を着た女性が大勢の妖怪に襲われているな」

『助けましょう』『でも紫の人優勢気味』『そつつすね』

「強い人……いや、妖怪かな?」「かもつすね」

「ん……なんか女の人の顔が体調悪そうだな……」「助けるツス」

「んじゃ、朱雀ビームを使うか」「お、新技すね!」

「昔見た漫画のネタなんだけどね」『へえ…え、兄貴…?』

朱雀の足がつかまれ、ぐるぐる腕を回し始めた

『あ、兄貴…目が回るっス〜!』「朱雀ビィィィム!」
『うぎやああああッスウウウウ!』

妖怪の集団にめがけて炎歌は投げ飛ばされてしまった……
そして妖怪の集団に命中……その瞬間女性は倒れてしまった

「ふっ、いいかお前ら……俺の力をなめたら……即死だぜ?」

「さてと……奴らはこの世から、後すら残らず消滅した……ククク
……」

『怖ええすよ……兄貴……』「しかし、火炎以外の技が思いつかん」
「さてこの女…性……ふむ……よし、とりあえず背負って行く。」
『とりあえずっすか?』「ああ、広くていい場所を探そうと思って
な」

『うっす。探すッス』「ああ……ゆっくり探すぞ!」『ス?』

覚は倒れていた紫色の女性を背中に背負い……

なんかいい顔になっているそして、いつもより遅く歩いて行った……

「ん、んん」「ほう、目覚められたか、お嬢さん?」

「ん、あれ……私は確か大勢の妖怪に襲われていたはず……」

「ふ、この俺が倒したさ」『兄貴は最強っス!』

「し、式？」 「やはり妖怪だったのか…お嬢さんは」

紫色の服の人の驚き方を見て自分達の姿が見えているので妖怪だと言う事を納得する

「そんな事より…あなたは人間よね？」 「そうだな」

「…よろしければ、私を助けてくれた白馬の王子様の名前を教えてくださいませんかしら？」

「ん、俺の名前は覚、東龍 覚だよ」「へえ、素敵なお名前…」「そうだろうかね？」

あまり自分の名前にそんなことを言われた事が無いがためにそう覚は答えた

「あと、私の名前は八雲 紫といます」

「そうか…なかなか強い妖怪みたいだなあ…ふむ」

「これでも人間誰もが恐れる大妖怪を自負してるんですけど…」

「ふむ。俺は怖くないしな…はっはは」

「…あんな状況から私をどうやって助けてくれたのかしら？」

「ん、神の力的なもんかな」

（しゃべり方が少し変わり始めたか？こっちが本質かね…）

「あなたは現人神なの？」

「ん？人間でありながら神ね…ま、そういうもんだと思うよ」

「そういうもの…すこしあやふやね」「かつこいいだる謎があるほうが」

「ふふ、あなたって面白い人ね」「くく、そうか」

『また俺おきざりつすね…』『いやはや、ははは』

『いや、マジに無視っすか…』

「…本当に面白い人」

「そっだ…あんた術とかいろいろ知ってる？」

「え、まあ、知ってるけど……」「よし、教えてくれ！」
「いいわよ、あなたになら」「うっし、じゃあ頼むぜ！」

と言うわけで、術の使い方の修行が始まる

幻想製作の旅は一時止まる……

『俺の活躍投げられただけっすか……』

覚が一人で全部頑張ってるからね

続く

第六話 朱雀ビームの元ネタは光の御子ビーム(後書き)

題名の所は御子であっていただろうか…

第7話 河童との友情劇 と CERRO:B

覚たちの修行が始まっていくつかの月日がたった……
材料を集めて家まで立てて生活を始めていた
ちゃんと個人それぞれの部屋もある上に庭付きである
人があまり来ないところなので安心なのである

「ゆかりん！今日はこれまでかあ？」「そうね、今日はここまで
ね」

「ふう……俺も結構術の使い方がわかってきたなあ、ハハハ……」
（妖怪が使うと言う術も覚えれば簡単に使えるか……）

朱雀の力とは何なのか……妖怪の力なのだろうか……
覚はこの力について考えていた……

『俺たち……ずっと暇っス……』「ハハハ……」

そんな覚の隣で炎歌は特に何もすることなく
空を飛ぶだけの毎日を過ごしていた……

あれから数日……修行を続けていた

「ここあの山も近いし……かけるにでも会いに行くかなあ……」

さすがに毎日毎日修行を続けているとつかれてきてしまい
休みが欲しかったので思いついた事である。

『頑張れば約二日でつくつすね』『紫に言って、行ってみるかね』

「というわけで、紫、俺ちよつと行ってくるわ」

「そう……気をつけてね」「ああ、5日後くらいに帰るよ」

そして、覚達は久しぶりにかけるに会いに行くために向かった

「ふふふ……覚が帰ってくるまでに色々準備しとかないとね……」

何かをたくらんでいる八雲 紫を残して……

満月の夜、かけるとであった山に覚は到着した

「いやあ、久しぶりだねえ。4年ぶり」

「なんかノリが軽くなつたなあ覚」「気のせいさ」

覚は久しぶりの再開でテンションがあがっていた
かけるはその覚のテンションに少し引いていた……

「それにしても久しぶりだなあ、どれくらいいれるんだ？」

「二日だな」「え、もつといれねえのかよ」

「久しぶりで悪いけど、俺も人(?)を待たせている……」

「ん、何だ……覚にいい人でもできたのか？」

かけるは小指を立てながら覚にそう言う

ちなみにこの行動の意味などは覚が教えた

「ははっ、違うよ……ちょっと習い事をしているだけさ……」
「そうなのか……」
「所でおめえ……好きだった子に告白は……」

覚は逆に小指を立ててかけるに笑いながら語りかける

「ぬ、ぬおっ！な、なんだ…俺が作ったきゅうりでも食べよ……」
「…ドンマイ」「何かむかつく……」

かけるの反応を見てどうなったのかを理解して
かけるの肩に覚は手をポンポンとたたく

「なあに、この先いい事あるよ」
「あると……いいなあ……」
「お前は俺の認める大親友だからできるよ……」
「覚……お前はすっごく良いやつだよなあ……」
「俺ほどいい奴はこの世の中にはいないぜ、なあ……かける」
「そうだな…人間って悪い奴ばかりじゃねえよな……」
「悪い奴もいるけどな、いい奴もいる……妖怪も同じだろ」
「そだな……人間は盟友……ってみんなが言うのも納得できるかな
……」

その言葉を聞くと覚は立ち上がり月の方を見る

「うむ、妖怪も人間もみんな同じ生き物なんだよ……だから悪い奴
もいればいい奴もいる
だから妖怪が人間を恨んだり、人間が妖怪を恨む……それは間違
いなのだ」

「お、おめえ……なんで今そんなかつこいい話し始めてんだ？」

「はっはは、何かカッコいい事いうムードだっただろ？」
「ったく……まあ……そうだよな」「うむ」『……………』

友情を深めていた二人の横で、ただ静かに眠る炎歌の姿があった
その瞳に涙をやどして

「んじゃあな、また何年かしたら来るよ」「ああ、またな」

『何と言つか……俺っち……』「ははは、何も言っんじやないよ…

…炎歌」

『む、むなしいつす……』「ははは、いずれ炎歌にもできるさ……

大親友」

『そうなるとうれしいつす……』「そうだ……ん、何か足元の地面
が……」

（あれれ〜足元の地面ないですって！）「これは、紫のうおっアア
アアア！」

『あつ、兄貴〜！』『さ、覚が何かに落ちた！？』

「うごっ、いてて……って……ここは俺の家じゃねえか……」
「ふふふ……」

覚に対していつもとは違う笑顔を見せる紫

「やはり紫か……なんだ、何か急いで帰ってきてほしい用でも？」

その顔を見て覚は少し警戒しながら紫に話しかける

「そう……あの式もすばやく移動する事もできないようですしね
「え、何？炎歌がいるとやばいことでも……」

覚はゆっくりゆっくりと警戒しながら紫から離れて出口に近づいて
いる

「そつよ……いると邪魔なのよ……ふふふふ」

「ていうか、布団……暗い部屋……男と女……」「ふふふ……」

覚はぞつとしていた……

(やばいぞー！卒業式は……)

「すまぬが……俺は処女としかしないと……」

そう言いながら覚は出口に手をかけようとするが

「あら、私は初めてよ……優しくしてね」

スキマから出てきた紫によってその行動は止められてしまう

「え……あの……その……え……ええ……あの……よろしくお願
いいたします……」

覚は状況に流される男であった……

その後

『兄貴、大丈夫でしたか？』「……ああ、大丈夫だよ」

『ど、どうなされたんですか?』

「いや、俺……ガンソード（アニメ版）の主人公と同じじゃなくなつたんだよ……」

『?俺たちにはよくわからないっすねえ……』 「わからんていい……」

わからない人にはわからなくてもいいそんなときもある
そんなお話もあっていい、自由とはそういうものだ。

「紫も初めては……嘘ではなかった……」

「私も愛もしない相手に初めてはあげないわよ……」

「……俺ってば流されやすい奴よ……」

かわいそうなのかかわいそうじゃないのかは人それぞれの考えである
そんなわけで、次回に続く!

『兄貴に一体何があつたんだろうか……』

永遠に謎であり続けるといいよ……

第7話 河童との友情劇 と CERRO:B (後書き)

ハッキリ言つと…ああいうシーンは書くなんて事は俺にはできなく
て…

そもそもかくと年齢層が縮められて見れる年齢層が減るでしょ？

第八話 不老不死者の枷

いろいろありました……色々初めて……初めてを失いから2年がたちました

「まあ、その、いままでありがとう……」「行ってしまふの?」

「まあ、その……ね……」

「残念ね……何度やってもあなたのここにとどまらないのね」

「ソナナコトイワレテモボクノイシデヤロウトシタコトハイチドモナイデスヨ」

「あらあら……強情な……私の初めてと心まで奪ったくせに」

「ソナナコトイワレテモデスネ……うううっ、もっとちゃんとした初めてがよかった!」

「うふふ……初めて同士なんてかなりいいことじゃないの……」

「紫さ……お前……俺の境界とかいじくってないよな……」

「いじくる訳……というか、いじれなかったのよ……あなたの境界だけは……」

「……そうなのか」「ふふっ、本当にあなたって不思議な人よ」

「……ふっ、これも人生……まだ俺は一つの場所にとどまりたくない……」

「そう……じゃあ……さよなら」「また……いずれな……」

紫と別れてから結構な期間が過ぎた……

かけるに一度会いに行っただがいなかった……

(なんだろうか……あれか、俺とが紫にされたような事を!

ていうか、いつからこの小説はそういう方向に進んだんだ……

いや、四話あたりからもうそういう感じだったな……うん……
つまりは気にしたら負けなんだよと言う事を教えているんだ……
「いやあ、あんたは貴族なのに普通に話してくれて助かるよ」
「はっはは、お前の料理はうまいからなあ」

不比等の娘を探していたら同じ藤原の家系の男と友達になつた
と言つか出会うまで実は旅の目的を忘れていた

「ふーん、旅に出るって？お前さん娘いただろ？」

「なに、すべてはお前に任せた」「俺に任せるだあ！？」

「俺は出家して歌で生きていくと決めたんだ、じゃな」

「あ、まてよ！お前！ゆーちゃんを娘を一人にしていくなあ！」

「家内がいるだろ」「父親が必要だろうがあああ！」

その後……ゆーちゃんと一緒に暮らす事になってしまった……
だがな……俺も不老不死の人間だ……そう長くは一緒に入れねえしな

……

「お兄ちゃん〜どうしたの〜速く川原で遊ぼうよ〜」

「ん、ああ……ごめん……今行くよ、ゆーちゃん……」

『兄貴〜なんだかお別れが言いつらいんすか？』

「ああ、そろそろ年齢とか的に限界だ……老けにくいではすまない」

「何してるのお兄ちゃん〜」「ま、今は遊ぶか……」

『兄貴……なんか優しすぎるっス……』『ふ、優しい……ね……』

「私ねえ、将来は絶対におにいちちゃんのお嫁さんになるのぉ！」

「はは、そうか。とても嬉しい事だな」

(この時代の貴族の娘が勝手に結婚できるのかな……)

歴史に微妙に煩い覚さんの考え……今が何時代か把握できれば……
と言つか明治くらいからしか身分差結婚はできないが……

「まあ、何だ……ゆーちゃん……話したい事があってな……」

「なに、お兄ちゃん……はっ、まさか愛の告白？」

「え、いや……俺そろそろ旅に出なくちゃいけなくてな……」「え
？」

「と言っわけで、ゆーちゃん……今日でお別れだ……」

「そっ、そんなのいやだよ！ずっと一緒に暮らしてよ！」

（くっ、あの親ありしてこの子あり……ああ、もう……）

覚はもうここに長くいたら周りから不思議がられるようになるだろ
うことは予測できていた……

それに……不老不死の物が普通の人間とともに生きていい訳がない

（それに生き残った不死者もつらいんだよ……）

俺だつてもう何人の友達が死ぬのを見てきた……

生き残っているであろう親友と言えかけられるぐらいだろう（紫は別）
なのでここは無理矢理にでも旅に出るべきだろう

「堪忍してくれゆーちゃん！俺は行かなきゃならん！」

「いやったら、いやなの」「行かなきゃならんの！」

「なら……私のお願ひ聞いてくれる？」「内容による」

「うんとね、一週間私の一緒に寝て！」

年端も行かない女の子とは何もおきませんよ……

「ハハハ……俺……能力仕えなかったら殺されてるな屋敷の人に……」
『かもつすね』

「うつつ、ひつく……お兄ちゃん……また……いつかね……」
「ああ、まあ……縁があったらまた会う事になるだろう……」
「……お兄ちゃん、ちよつと顔寄せてもらえる？」
「ん、なんだ？」「いいから……」「ふむ……」

定番のほっぺにチュウかも、と試練と思って顔を寄せると
年齢による規制がかかる口付けをされてしまった

「……おい、ゆうちゃん……このテクニクをどこで……」
「お母さんが好きな人はこれでいちころだって……」

覚は呆れてしまった……顔も変になっていたが
気を取り直して普段の顔に戻った

「……まあ、いい……ではな……ゆうちゃん」
「うん……またね」

内心、あの尼娘に何教えとんじゃあと言う気持ちでいっぱいだった
……

（しかし……ゆうちゃんは俺との別れでできるだけ泣かないように
していたな

強い子だったな……ゆうちゃん……俺みたいなの解消無しじゃないいい

旦那さん見つけるよ)

『俺っち、このごろ存在意義を見失い始めまして……』

何かごめんなさい

まで、次回！

第九話 原作設定？なにそれ、おいしいの？

あの別れからかなりの時が過ぎた……あれからと言うものいろいろあつた……

日本をぶらぶらし、戦を観戦したり……傷ついた人を助けたり……いろいろなことがあつた……特に何事もなく旅は続けられていた……が、あるとき人を助けていたところを見たある娘が覚に弟子入り志願をしてきた。

「つまりは、お師匠様は人間を超越した存在であられるのですね！」

「まあ……そうなんだけどね……君なんだっけ……狼天狗の……椀？」

「はい、犬走 椀です」「ああ……そうね……で、何故俺に弟子入りを……」

「私です……強く、そして優しくなりたいんですよ！」

「強く優しく……ねえ……」（俺はそう言う柄なのかねえ……）

「英雄は別に正義のヒーローってわけでもない……そう言う奴もいるけどな……」

「私はまだまだ若輩者ですし……みんなを守れるかわかりません」

「ふむふむ……いまだき熱心な若者よ……」

『見た目からはあんまり歳が変わらないようにみえるっすけどね』

「余計な事は言わなくていいのだ……」

実際の所は結構歳の差があるような気がする……

いや原作の設定詳しくないし……年齢載ってないもん……

「まあ、今時の普通の人間は妖怪見るとすぐに攻撃だもんねえ……」

「実にそのとおりですよ！すべての人がお師匠様のような人であればいいのに」

「そこまで言われるとね……人間に害をなさない妖怪を攻撃する人間がいなくなればなあ……」

「いつかきつとそういう時代も来ると思っんですよ」「ふむ……」

「まあいい……じゃあ修行の旅にでも行く？20年くらい」

「はい！」

何かポンポンとご都合主義的に話が流れていく……

「んで、お別れ言う人とかいない？」

「そうですね、友人の河童にお別れを言ってきました」

「あいあい、待っとくよ」「はい、少々お待ちを」

（河童があ、かなり長い間かけると会ってないなあ）

かなり前（本編以外でもあつてはいる）にあつてきり……かけるの姿を見ていない

あいつは今何をしているのか…幸せに暮らしてるのかな……

『しかし兄貴、いつも修行と言うのはもう少し短い年数だったのに

……

20年も一緒に旅をするとはどういうことですか？』

「ん、いや……彼女は真面目そうだし、妖怪だし、こつというのは長いほうがいいかなと」

『もう最後のだけで十分な気がするっス』『お師匠様〜！』

「ん、帰ってきたか……んあ……河童と一緒に」

（ん？なんか誰かに似ているような……）

どこかの誰かに似ている……誰だったかは思い出しかけているが思
い出せない

と言つ矛盾が覺の頭の中を駆け巡る

「お師匠様。友人が一度あつてみたいと言つてついでにきました」
「どうも始めまして。河城にとりです」
「ん？河城？」「あれ、どうかしたんですか？」

覺の頭の中を駆け巡つていた答えがでた

「あれ……まさか……かけるの娘！？」「ど、どうして父さんの名を！」

「おおっ！あいつ結婚したのかよ！いつの間にだよ！」

覺は驚きを隠せていない……というか親友の覺に伝えずに
行つたと言つ事が驚きだ……山を引越してまで

「知り合いですか？」「親友だよ」「へえ〜」

「お師匠様はにとりの父上のご友人だったんですね」

「んで、かけるは今何してんの？」「普通に生活してますよ」

「普通か」「ええ、暮らしやすいここに引越してからずっと」

(まあ、あの山に言つても何も無いわけだな……)

「それにしても、敬語口調ってなんかしゃべりにくくない？」

「それもそうなんですけどね」「かけるの娘だしな……」

「お、かなり詳しくそうですね」「色々教えてやるよ」

「はは、実に面白い話ですね」「うむ……そろそろ行くかな」

「はい、お師匠様」「じゃ、かけるによろしくな」

「はい」「最後まで敬語口調だな……」

「まあ、伊吹様達出なれてますからねえこの口調」
「伊吹様？まあいい…じゃあな」「ええ…また」

「なんだか、いつもと違う感じでしたよ」「そうだろうなあ……」
「兄貴どこに行くんですかい？」「風の向くままかなあ……」

もう原作の設定をかなり無視しているだろうが知ったことか！
これは二次創作なんだぜ！次回に続くぜ！

『椛さんが来たら俺っちの出番がさらに……』

次回に乞うご期待！ 『流さないで〜！』

第十話 信頼

妖怪たちがすむ山……そこを守るために修行の旅に出た椀……
上下社会が厳しいところなのに来てよかったのかは知らない……
原作設定なんて俺は知らないんだから！

「修行の旅に出たものの……特に修行してないよな……」

『でも椀はそうは思っていないみたいですね……』

「弟子つてさ……師匠信用しすぎだよな」

『俺もほしいつすね…弟子』「……ふむ」

「お師匠様〜何してるんですか〜早く行きましようよ〜」

覚達が話していると椀が覚たちを呼ぶ

「……行くかな」『うつす……』

「色々あってもう10年たったなあ……」『早過ぎませんか？』

「そうだなあ、作者の都合も入ってるなあ……」

メタ発言である

「お師匠様のおかげで強くなれた気がしますよ」「あ、そう……」

「はい」「ならよかったよ……」

(絶大な信頼感をもたれている……か……)

そして、覚はふっ、とかすかに笑った。

「よつしゃあ、修行十周年記念にご馳走を作るぞ！」

「うおおっ、お師匠様太っ腹です！」

「はっははは、よきにはからえじゃあ！」

覚は椀の自分への言葉に喜んでいた。

「ふにゆ……もう食べられませんです……」『も、もういらね……むにやっス……』

「寝たのか……さて……なんでそんなところにいるんだ紫……」

幸せそうな顔で眠る二人に毛布をかけながら覚は近くに感じた気配の人(?)物、紫に話しかける

「あら、気がついていたのね」「お前の気配ならわかるさ……」

(いやと言っほどね……)

覚の体が少し震えている

「ずいぶん探したのよ……生きているとは思わなかったけど……」

「思ってなかったのに探してたのか……」「幽々子に聞いたからね

……」

「む、ゆーちゃん!?何故その名前が……」

そう、ゆーちゃんの本名は幽々子である

「友人だったからよ、友人」「そうか……もう昔の話だしな……」

「彼女ね、若くして自殺したわよ」「え?」

寿命で幸せに死んだものだと思っていたのに、自殺と言う事実をを
教えられ

覚は驚きなどとはかけ離れたような顔をする

「彼女の持っていた能力……死霊を操る程度の能力が死を誘う程度
の能力になって……」

「ふっ、ゆーちゃんは優しい子だったからな……そうか、耐えられ
なかったか……」

「でもね、彼女は今は新しい人生を送っているわ……」

「む、転生でも……」「亡霊になって生活しているわ」

覚は少し悩んでいるような表情になる

「亡霊……未練を持つ肉体を持った幽霊みたいなものだったっけか？」

「まあ、そういう所よ……でもあの子は未練が少なかったから普通の
亡霊とは違う……」

だからあの子は普通に暮らしてるわ……死んでるんだけど」

「それで、ゆーちゃん幸せかな」「きつと幸せよあの子は……（昔
の記憶はないけどね）」

「で、どこにいるの？」「白玉楼よ」「俺行けねえな……」

「多分いつかいけるようになるわよ」「ふむ……」

そして覚は空を見上げ幽々子と暮らしていた日々を思い出していた

……

「じゃあ私は行くわよ……結界の話……忘れないでね」

「ああ……」「準備が整ったら予備にくるから」「ああ……」

覚は少しうわの空であった

（紫は月の侵攻を手伝えなど言われたが……輝夜の事もあるし……
かわりたくないと言ったら……理想郷作りに協力するように言
われた

……妖怪と人間が平和に暮らせる場所か……いいな……）

そう言いながら覚は眠る二人を見て幸せそうな顔をした

次回に続く

第十一話 海をこえて…

あれから4年…特に何事もなく普通に旅をするばかりだった…

「……海外に行ってみようか」「お師匠様、海外ですか？」

「朱雀の力を手に入れてからずっと日本にしかいなかったしなあ…

…」

『そつつすね……』「と言う事で本邦初の式変化だ！」

『おおつす！式変化！』

式変化により人が何人か乗れるような大きさになった炎歌

『ちなみに式変化と言うのはですね……』

「視覚死角をうまく使う方法も紫との修行で会得済みだしな」

「すごいです！お師匠様！」『俺っち無視すか……何日飛びつづけるんかね……俺っち』

「なに、俺達も途中から自分達で飛ぶさ、うん」

と言っわけで日本を飛び立った一同……椀の喜び様は半端ではない

……

(てか暴れると落ちる……いや、飛べるからいいんだけどね……)

「とりあえず飛んでもらったわけだが……炎歌……ここはどこだ？」

『いや、あのですね……適当に飛んでたらここまで……』

「お前……俺達が寝てる間にどれくらい飛んだんだよ……」

『いやあ、驚かせようと思ひましてね』

中国大陆すら軽く越えていたのであった……

「……しかしここはどここの国だか……ヨーロッパか？」

『ヨーロッパは国の名前じゃないつすよ』「わかっているけどさ……」

「ん……近くに町があるな……よし視覚死角を使って町に向かうぞ」

「わかりましたお師匠様」『了解つす』

「どれどれ……ン？魔女狩りねえ……」『魔女狩りつすかあ……』

「魔女狩りはヨーロッパと北アメリカで行われていた……」

『怖いつすよねえ』「何もしてないのに連れて行かれたりするとな」

覚は時代の考え方の違いと言うものについて考えていた

「た、助けてください……私は何もしてません！」「嘘付け魔女め！」

目の前で女性が一人火あぶりにされかかっていた

その後ろには何人も女性の姿も見える

「あの女性は魔力の欠片も見えないんだが……助けるかな……」

「さすがお師匠様です。弱い人たちを助けるんですね！」

「人たち……といわれても一人じゃすべてを助けられるとは思わんがな……」

『とりあえずあの人をどうやってたすけるんすか？』

「短空間転移の術を使う……視覚死角で近づいて……転移すればい

い

『でも短距離しか転移出来ないんでしょう?』

「まあ……何とかなるんじゃないの? 何とかさ」

『兄貴のその自信はいつもどこから出てるんすかねえ……』

「お師匠様は完璧だからですよ。炎歌さん」『理由にならねっス…』

…』

炎歌は呆れていた

そんなこんなで、救出に成功したが……魔女だとうだかと騒ぎが起きた……

「まあ、いきなり消えたらこうなるとは思っていたよ」

『予想はしてたっすけどね……』

「お師匠様はこれも考えのうちだったんですね!」『へ?』

「炎歌、騒ぎが起きてるほうが逃げやすいよ」「さすがです!」

『ふむう……』「とりあえず飛んで逃げるぞ」

みんな騒いでいて空を見上げても何も見えていないようだ……
見えたとしても鳥にしか見えていないらしい……

「さて、大丈夫かこの人ら……」「う……ううん……」

覚が心配していると、火あぶりにされかかっていた人が目を覚ました

「お、目覚めたかご婦人」「え、ここは……」
「んーと……あ、俺は正義の魔法使いかな」
「ま、魔法使い！」『兄貴何いつてんすか！俺っちらは……』
「炎歌は黙ってて……」「私を助けてくれたんですか？」
「そっやね……」「ありがとうございます」
「ま、当分はこの簡易の家で暮らすといいよ……人も来ないだろう……」
「ありがとうございます……」「では、数週間したらまたくるので……」

そして能力で作った家に魔女狩りから連れ出した女性を置いていった……

「お師匠様、あの女の人が言った言葉が理解できたんですか？」
「まあ……出来るんだけどね……何語なんだろうか……」

理解は出来る……朱雀の力なのだろうか……理解は出来るだけ……

「しかし……あの人をどうするかだな……ふむ……そっだ！」
『何かいい名案がうかんだんっすね！』
「あの女の人を魔女にしてしまおう……」「へ？」
「そうしてしまえば……普通の人間には捕まるまい！」

逆転の発想であった……

中途半端なところで続くよ……何かごめんなさい……

第十二話 無理をすると話も無理矢理になる

「朱雀の名において……われこの魔術……創成する！」

その瞬間に広がる光……そして生まれる……新たな魔術……
そして生み出される力……そして世界に定着した……

「ふふふつ……これで……俺が考えた魔術の完成だ……」

（そう……俺が考えた魔術……これを使って……魔法使いをこの世界に作る……）

覚の顔は今までに無いほどの笑顔であった

覚が魔法を作った理由は魔女狩りの被害にあう無害な人たちを逆に魔法使いにして助けてしまおうと言う考えのためである
いなみに、あの女性の後に何人かの魔女狩り犠牲者を助けている
前回のことを簡潔にしました的な感じである。

「と言うわけで、この俺が作った紋章を体に刻み契約の言葉を言う
てください」

「はい、わかりました」「では、皆様方、俺はこれで」

案外あっけなく終わった…案外あっけなく終わった……

「しかし兄貴、あんなに簡単に魔術を使えるようにしたりしてよかつたんですかい？」

「大丈夫だ……普通の人間に対して攻撃の魔法は仕えないようにしてある。そして……」

「そして？」

「俺の魔術を使う奴らは俺の言う事を必ず信じる」「へ？」

「俺が作った魔術を使える魔法使いが俺と敵対する事はない……というか服従する」「それって……」「ま、人も襲えないし……何もおきないと思うが……」

「さすがですねお師匠様は……苦しむ人を救い、新たなる災害を防ぐようにするとは……」

「いいんすかね……これで……」

無理矢理終わらせた感じが強いが……まあ気にしてはならない……

「ん、観光以外に特にすることないなあ……ヨーロッパ……」

覚は欠伸をしながら歩いている。

「でも歴史的建造物を見れてよかつたじゃないっすか」

「まあ、俺そついうの好きだから見れてよかつたけどね」

「外国つてすごいですね、お師匠様」「そつね」

はしゃぐ椀を見ながら空返事をする覚

『んで、どうするんです兄貴？日本に帰るんすか？』
「ふむ……もう今見れる範囲で見れる建造物全部見たしなあ……」
「楽しかったですね外国」「三ヶ月くらいしか滞在してないけどな」
「人助けができて楽しかったですよ！いい修行になりました」
「……うむ！」『……本当にいいんすかねえ……これで……』

炎歌は何か納得しきれていなかった……

と言っわけで……日本に帰る覚ご一行……

これでよかったのだろうか……次回に続く……

外国らしい話が思いつかなくてごめんなさいでした……

第十二話 無理をすると話も無理矢理になる（後書き）

本当にごめんなさい…なんか無理矢理すぎました…つまらなくてごめんなさい…

第十三話 言ったらそのまま(前書き)

今回はいろいろなための色々です

第十三話 言ったらそのまま

日本に帰ってきてかれこれいくつかの月日がたった……時が流れるのは速いものである……

「あともう二日で20年かあ〜いやあ、早い様な長い様な修行の旅だったな」

「……はい、楽しい旅でした……」「ふむ、終わるとなると寂しい物があるな……」

修行の旅と言っても特に修行らしい事もしていないが、一緒に旅をしていた機関の色々な

出来事のことを覚は思い出していた。

「はい……」「なんだ、なんだあ椀い〜いつもの元気がないぞあ〜」「はっ、はい!」「うむ……いつも元気でいてくれよな」

別れと言つのは誰もがさびしいものなのである

「椀とお別れだし……特別な料理でも作ってやろう……」

『特別な料理すか』『そう……特別な料理よ』

『豪勢なもんができるんでしようね〜』

「焼き鳥とかな……」「あ〜こっち見ながら言つのはちよつと……」

「ふふ……とりあえず……魚を釣りに行こうかな、魚を……」

そして覚は近くの川へ向かった……炎歌は魚以外のものをとりに向かった……

「この川にするかね」「おっ、おおお！覚じゃないか！」

覚が魚を釣ろうとすると川のほうから突然大きな声がした
すると、少し変わったが、見覚えのある顔があった

「む！もしや……かけるか！少し老けたなあ！」

「うるさいなあ！人間なのに老けずに長生きなお前のほうがすごいよ」

かけるとは久々の再開だがノリは昔のままである
それは聡にとっては純粹にうれしい

「気にするでない……しかしここは山から少し離れていると思うんだが……」

「いや……そのな……実は家内と喧嘩してしまっ……」

「家族がいると大変なんだなあ」「自分の事じゃないからって……」

かけるの困り顔を見て覚は大笑いをしていた。

「ははは……」「ところでだな……お前……にとりに何を話した？」

「真実」

「色々大変だったんだぞお」「はっはは、自業自得よ」

昔のように普通に会話していた覚…すると、唐突に表情を変えたかけるが覚にとある話を持ちかけた

「ったくよぉ〜…なあお前さぁ…にとりのことをどう思う？」

「にとりちゃんか？優しそくない子だったな」

「そうか…お前にだけいいとこ見せてるように思えるなぁ…」

「そうなのか？」「うむ…お前なら任せても大丈夫だと思うが…」

…

「え、なに？」「お前…嫁いねえよな…」「な、なに？」

「にとりとか嫁にいらねえか？」「な、何を突然…」

突然のかけるの言葉に覚は驚きを隠せなかった…

「いや…お前以外に信じられる奴つてのはいないしな…」

「いやいや…本人の意思も確認しないで…」「ふむ…」

少し考えたような顔をするかける…

「まあ…今は魚を釣って…椀のお別れパーティを開くのさ…」

「ま、椀を山につれて帰ってきた時ににとりにあってくれればいい

…

「…ふむ」

そして覚は会話しながら釣っていた魚を持ち、集合場所へと帰った

…

「という訳で椀…明日でお別れなわけで大量の豪華料理だぞ」

「うわあつ、すつ、凄いです！いつの間にこんなご馳走を！」

覚の作った食べ物を見ておおはしやぎな椀
覚はそれを見て笑顔になる

「魚以外は炎歌が調達してくれたんだけどな」

「へえ〜」『何かどうでもいいような感じの返事っス……………』

「炎歌は頑張ったよ…さて、食うがいい！俺の料理を！」

「はい！」『俺っちは凄く頑張ったッス〜！』

『俺っち…………ZZZ…………』「炎歌は寝ちまったかあ…………さて…………後片付けと…………」

「手伝いますよ、お師匠様」「一人で大丈夫だよ」

紙などで作られた皿を朱雀の力で作った火で燃やす…………
自然に害なく処理できていい感じであるよ…………

「お師匠様と旅に出てから私は強くなれました…………」

「ははっ、山のみんなを守るための修行の旅だったしな」

覚は笑いながら喋るが椀の顔は少し暗い

「私…………お師匠様に色々教えてもらったのに…………何も恩を返してませんね…………」

「ははっ、別にいいよ…………楽しかったしさ」

「でも…………」「ふむ…………ならさ、体で払え！…………なんて…………」

「わかりました！」「ふへ？」「私初めてですけど頑張ります！」

「ふへ……へ？」「お師匠様にならすべてをささげます！」
「へ……ふへ……え、ええ?!」「さあ、お師匠様！」

その後……場の流れに流されてしまうのであった……
場の空気に流されてしまう男であった……

『むにゃ……俺っち……頑張った……ZZZ……』

次回に続くデイス

第十四話 流れ流され

「じゃ、じゃあな椀……げ、元気でな……山をちゃんと、ま、守るんだぞ……」

「は、はい……が、頑張りますう！お、お師匠様！」

なにやら両者ともども普通に会話する事ができないようだ
感動のお別れだというのに……

『兄貴、何かあったんですかい？』「い、いや……別に……」

『ならいいんすけどね』「と、とにかくこれで……」

「あ、はい、今まで本当にありがとうございました！」

「じゃ、じゃあな！」「は、はいい！」『何か釈然としてないっす……』

「お前釈然の意味わかってる？」『全然っス』

と言っわけで……椀との別れはしどろもどろに終わっ……た……

近くにかける達の姿はなく……かける達が住んでいると言っ場所に
来てくれと言われていたので、覚たちは行く事にした……

「さて、あっちの方が……」

「おお、きてくれたのか覚」「ああ、来てくれと言われたからな……

……

「さ、覚さん、こ、こんにちはです」「ああ、ども」「

「むう、どうしたにとり〜いつもと話し方が違っぞ〜」

笑いながら娘をからかうかける

「父さんは煩いよ!」「ふっ、お父さん邪魔者か〜」

「父さんもいつもと感じが違うよ……」「そっかなあ〜」

「……なんだこの親子の会話は……」「俺わかんねっす」

どこかテレビで見たような痴話喧嘩が目の前で繰り広げられていた

……

「んで、覚よ……あの話は考えてくれたかよ?」

場の空気がよどみ始める

「え、あの話?」「そう、にとりを嫁にもらっ話」

「ちょ、お父さん何なのその話は!」「いや……そのな……」

かけるはにとりに例の話をしていなかったようであり、にとりは驚いていた

「よく知らない人といきなり結婚なんて無理だよ!」

顔を赤らめて反論するにとり。説得力が無い

「俺もそうだと思うぞ〜かける〜」

覚もその言葉を肯定するが場の空気によってはっきりといえない

「む、むう……しかしだなあ……お前ほど信頼のできる奴は……」

「あつ、ならさ、一緒に旅しないか?」「へ、旅ですか?」「んで、気に入ったならそのまま結婚てことだな!」「え……あ、うん……」「ふえつ、ふええええ!」「よし、お前ににとりを託すぜ!」「え……あ、うん……」

覚は再またまた流れに流されてしまった……

山から離れた場所……覚ご一行は……

「あ、まあ、その……これからよろしく……」「あ、こちらこそ……」

『……』『ど、どうした炎歌……』
『俺っち……この頃……存在意義を失いつつあるっス……』

炎歌は極上の涙を流しながらそう語る

「あ、いや、炎歌は俺の大事な相棒だから……ん……足元にスキマあ
ああああ!」

『この展開……前にもあったっす!』『え、なに、なにこれ!?!』

河童に出会つとスキマに落ちるのは運命なのだろうか

「こ、ここは……昔修行のときに使ってた家?」「そうよ」「ゆ、紫!?!」「スキマでつれてきたんだから私しかいないわよ」

覚は体の震えが止まらない……体が何かを思い出している……

「そ、それもそうなんだが……なんだ突然……10年ぶりじゃないか……」

「そうね……ところで今から結界製作を手伝ってもらおうよ」

覚の体の震えが止まった、何かを安心している……

「い、今からなのか？」 「そう、今からよ！」

「わ、わあつたよ……」 「じゃあ早速始めるわよ！」

「これで完了か……」 「ええ、協力ありがとうね」

「あの山とかも結界の中に入っちまったがな……」

「さてと、じゃあ、結界作った分の力を回復しましょう！」

覚の体は再び体が震え始める

「え、何か嫌な感じがしましたよ？」 「うふふ……」

「う、うふふ？」 「さあ、久しぶりの夜を！」 「うっ、うわあああ

あ！」

流れに逆らう事ができない覚であった……

「……俺さ……紫の事嫌いじゃないけど……まだ旅がしたいんだよ……」
「にとりのことは黙ってしよう……何かいらんことになりそうだ……」

「そう……本当に残念だわ……」「ああ……またな……紫……」

そついうと覚はスキマでつれてこられる前にいた場所に帰った……

「ふふふ……今日は危険日なんだけどね……ふふ……」

大妖怪は不気味に笑っていた……

「にとり〜炎歌〜」「ああつ、やっと見つけたっス!」

「覚さん、今までどこに?」「ん、ちよつちな……」

『あれ、そういえばあの山が見えないっス!』

炎歌がそう言うのととりの顔も驚いた顔になる

「ええつ、ほつ、本当だ!」「結界だな……」

覚が説明する

『け、結界すか?』『紫の理想郷のための結界……』

「理想郷?」「妖怪達が平和に暮らす理想郷……」

『……妖怪が平和に暮らすための理想郷ね……』『炎歌?』

炎歌の様子が今までとは少し違っていた

『あ、いや、なんでもないっす……』

「で、私の故郷の山もその結界の中なんですか？」

「ま、そうだな……にとりだけでは山に戻れんかも知れんな……」

「……じゃ、覚さんと旅に出るにはいいきっかけかもしれませんね」

「ふっ、かもな……」 「じゃ、行きましようか」 「うむ……」

流れに流される男、東龍 覚の流れ旅は続く……

第十五話 理想郷は理想とは違った

にとりを加えた一行のたびが始まりいくつかの月日が経過した

「これがイギリスの産業革命か……」

『産業革命とは言われてませんがね、この時代では……』

イギリス……というか歴史の出来事が見たいがためにイギリスに来ていた……

「ふう〜ん、これが機械かあ。「ん、興味があるのか？」

「うん、なんかね……色々いじくったりしたいなあ……」

機械を見ながら何か怖い事を言うにとり……長い期間一緒に旅をしていて

いつの間にか敬語ではなく普通に喋る様になっていた……

「機械っておもしろそうだね」「ん、そうか……悟」

覚に話しかけるこの青年の名前は悟……何者かという……

「親子は似るもんなのかねえ……」「はっはは、そうみたいっす！」

旅の途中にとりと覚の間に生まれた息子であった……命名は覚である

名前は自分（覚）にとりとかけるから一文字ずつを使って名づけた。

ちなみに流れに任せてしまったと言う事だけを言っておく

「しかし、色々見て回ってはいるが……俺……かけるに悟のこと報告してないな……」

「かけるって誰？」「ん、ああ、お前のお祖父ちゃんだな」

「へえ、生まれてから一度も、お祖父ちゃんにあつた事ないね」

「うむ……もうすでに生まれて結構たつけどなあ……」

「結構ってレベルじゃないよね……」「言うなよ、悟……」

結構というのはどれくらいの期間の事を言うのか覚はわかってわいないが

覚がかけるに最後に会ってからかなりたっているだろう……

「んじゃ、行くか？理想郷……幻想郷に」

「私はもうちょつと機械の事を知りたいかなあ……」「にとり……」

父親に会いに行く数に他のものに熱中するにとりに覚は呆れてしまった

悟がかけるの事を知ってから結構な期間がたった……

いやでも、マジで結構と言うのがどれくらいの期間の事言うのかわからんけど……

「なんやかんやで幻想郷の結界近くだ……」「長かったねえ、ここまで来るのも」

「さて……とりあえず……この結果いに一時的に穴を開けてやる！」

覚が手に力を込めると目の前に穴が現れる……その先には今まで見

えなかつた光景があつた

「ほえ〜父さん凄いなえ〜」「ふ、お前も俺の息子……少しは朱雀の力を使えるはずだが……」

「ふうん、よくわかんないや」「そうか……」

「おーい、二人とも〜」「おやおや、にとりが呼んでらあ……」

先に穴の中に入りにとりが覚たちろを呼んでいた、覚と悟はそれに答えにとりのほうにかけて行つた

そして覚はこの先で驚愕の事実を知る事になるとは予想していなかつた……

山の近くに來た覚達……

(てかこの山は椋の……)

考えことをしていると、どこからか誰かが現れた

「待つてください！ここから先は危ないです！」

「ん……天狗……椋ではない、のか」

「も、椋って！なぜ母さんの名前を……」

「え、か、母さん?!あの椋に息子が!?!」

(てか……まさかよ!まさかだよな!)

覚の体はかなり震え始めている……

にとりとの間に悟ができたときのような感覚である

「あの椀にね……ん？ねえこの子さ……覚に似てないかな……」

にとりの前半の声は明るく高いが後半の声は暗いく低い

「え？に、似てるだって！？そ、そんな馬鹿なあゝ」

そうは言うが覚の体は先ほどより震えを増している……
言葉もはつきりと喋る事ができていない

「うゝん、僕にもお父さんに似ているように見えるな……そして僕にも少し似ているような……」

「そんな……俺は椀とは……」「ねえ、覚……椀とは……なんなの？」

覚は……過去の……あの時のときの事を思い出してしまった……

「え、あ……えと……」「私の母さんの名前を知っているあなた方はいったい……」

「あゝ、君、お父さんの名前知ってる？」「ちよ、悟！聞くのまっ……」
「え、たしか覚だと母さんは言っていましたよ」

覚の震えていた体は硬直した……覚は【ヤバイ】と思った……

「え、あ……ねえ……」「ねえ、覚……これって……」

「あ、いやあ、これはねえ……」

（あれがあれであれ！流れ流れに任させて！）

覚が慌てふためいていた……すると……

「あ、母さん!」「母さん、と言つと……」「

にとりと悟の言葉が重なる

「あああ!お師匠様!」「も、椀……」「椀だね……」
「お会いしたかったです!」「ん、あ……そう?」

覚は言葉が棒読みである

「久しぶり、椀」「あれ、お久しぶりですね……」

二トリに対する接し方が覚は違いすぎる

「ところでさあ、その子……誰との子?」

そのにとりの質問は地獄への入り口だった……

「え、ええと……その……お師匠様との子です!」

その瞬間覚は飛んで逃げようとした……その瞬間である!

「あら、覚……ここにいたのね……」「ゆ、紫!？」
「へえ、この人が親父かあ……」「へ、へ?」

そして地獄の一丁目

「あ、俺あなたの息子。よろしく……」
「うつ、つわあああああああ!」

理想郷は地獄……であつた……

続く

『で、出番が……』

続くつたら続く！

第十五話 理想郷は理想とは違った（後書き）

修羅場って書いてて面白いですね…

第十六話 絶対無敵で元氣爆発で熱血最強で完全勝利…とは何なんだろう…

「う、あ……………う……………ボクニモコノジヨウキヨウハヨソウガイデシタ……………」

覚の動きは棒読み程度ではなくなっている……………昔の機械のように動きがぎこちない

恐怖に体がとらわれているのである……………椀と紫は静かなのだが……………にとりだけが凄い事になっている……………火山が噴火するがの如く……………

「わ、私はお師匠様のことをひどい人とは思ってませんよ!」

「ふふ、一夫多妻っていうのもいいんじゃないかしら」

紫と椀はこの状況に怒りを感じていないようだ

覚には二人が天使に見えたが……………何と言うか女神にも見えたが……………

「覚〜!私というものがありません!」

(そんな怒られても……………私今まで知らなかったです……………)

俺自分からやるうとしてやった事は一度もないですが……………

全部流されて知らぬまにですが……………にとりも仲良くなって知らぬ間に……………

紫にも無理矢理されたし……………椀はなんと言うか……………ああ、俺って……………)

流れ流される男、覚 流され不運で 地獄行き

「デ、デモデスネ?コノフタリトシタノハキミトソウイウコトスル
マエデシテ……………」

「言い訳ご無用だよ!」「そ、そんなああああ!」

にとりの地獄攻めは開始された……

（おかしい……無限の命を持つ俺が……恐怖して……限界まで体力を……なぜ……）

覚は真っ白に燃え尽きていた……

「父さんが……絶対無敵だった父さんが……母さんに……何これ怖い……」

「あれが父上ですか……私の思ってた父上は……」

「なんつつか、あれ普通の人間だわ……」

息子達の話し声が聞こえる……

（うつ……うつ……俺って……俺ってば……なんと情けない……俺は……自分は……弱い男じゃなああああ！）

「うつ、うおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

覚の中の何かが爆発した

「な、なに！」「な、なんですか！」「な、なんだ！」

「俺はあああ！絶対無敵で元気爆発で熱血最強で完全勝利なんだあああ！」

完全勝利という言葉が確実に無理矢理なのだが……気にしてはなら

「ふっ、はははは……幻想郷の結界なんざああああ！」

なんとさえばいいのか、恐ろしい光景である……
そんなこんなしているうちに結界の外である……

「ふっ、ふっはははは！俺は絶対無敵で元氣爆発で熱血最強で完全勝利だああ！」

覚の暴走はとどまっていなかった……

「……ふ、むむーむぐう」 「……ああ、坊ちゃん達は感じがらめっス……」

覚の能力で現れた特製布に包まれ3人は無抵抗のまま閉じ込められている

「俺は絶対無敵で元氣爆発で熱血最強で完全勝利なのだああああ
！」

「……む、むううう！」 「……ああ、降りるタイミングがわからねえっス……」

タイミングなんか考えずに降りればいいのに……ん？違うかな……
これ？

次回に続くよ

『どつすりゃいいスかあ！』

いいから次回まで待つのだ

第17話 親子…ドロドロした家庭事情

暴走をして……気がついたら湖に炎歌が墜落し溺れ始めていた……
いや……沈み始めていた……

「な、何だこの状況は！」「」「む、むぐう〜！」「」

「な、何かごめんな……」「いきなりすぎて、何がなんだか……」
「なんと言うかいつもこんな感じだよ……」「そうなんですか」
『ぐっ、がはっ……し……死ぬかと思ったっす……』

湖から近くに上がり、息子達に謝罪の言葉を言う覚……

「なんと言うかさ……あの時はなんと言うかさ……」

「なんかはつきりしねえなあ……親父……」

「父さんはいつもこうだよ」「そうなんですか」

(息子達はあつたばかりなのだと思うが……仲いいじゃねえか……)

流星は俺の息子達、と言う感じと見て思う覚であった。

「そう言えば……悟以外の二人の名前知らない……」

そう、息子達だと言うのに会ったばかりなのだ……

「ん？そう言えば……教えてなかったよな……」

「そうですね、父さん、私の名前は彰人です」

「俺の名前は蒼だ、よろしくなあ〜親父」

「ふむ…と言うかお前ら…俺に似てるなあ〜」

三人並べて覚はそう呟く

「そうだねえ…少しだけねえ〜」 「そうなんだろうね、親子だし」

「それは嬉しい限りですね…父さんに憧れてましたから」

「俺にか」「ええ、母さんに聞いていましたから」

「ふむ…（椀は俺に心酔していた感じがあったしな…）」

覚は息子達は母親の影響を受けてるなあ〜一人納得していた…

「兄弟順で言うくと長男は彰人で次男は蒼で三男は悟だな」

「へえ、お前俺の兄ちゃんなんだ」「そのようですね」

「つまりは父さんさあ…椀さん・紫さん・母さんの順に…」

「それ以上は言うなよ…なんかよくないだろうが…」

なんと言うか対象年齢がまた上がってしまっただろう…

と言うか覚の顔色はどんどん悪くなってきた

「それにしても…これからどうするつもりだあ？親父」

「ん〜と…とりあえず修行の旅に…」「ふ〜ん…」

「…まあなんだ…幻想郷には当分は行きたくない…」

「ふ、父さんの私情が入ってるね」「言うではないわ!」

覚の怒鳴り声とともに顔色が普段のとおりになる

「まあ、よしとするわ…」「私もいいです、父さんと旅がしたいです」

「よし、んじゃあ…行くか!」「」「はい!」「」「」

『ん〜青春っスかねえ〜』 「さあな……」

何か暴走した覚の私情での修行の旅の始まりだが
さて、どうなる事やら……さて、次回！

『俺っち……これから先が何か不安っス……』

「気のせいと言っ事にしとけ」

続く！

第十八話 再開

「日清戦争か……日本もいよいよ近代化開始だな……」

あれからかなりの年数がたった……何か立ち過ぎてる気もする……

「日清戦争で何んなの父さん？」「悟か……うむ……日本と清の戦いだ」

「日本と清が戦争？でかい中国に日本が勝てんのかあ？」

「科学的には勝てると思うよ僕はね」

「科学力ねえ……」

その顔は少し眠そうである

「日本は学問を学ぶのも義務づけましたし」

「学問……ねえ……」

更に蒼の顔は眠そうになる

「蒼も真面目に勉強してくれればな……」

「勉強ねえ……んなもなくても平和に生きてるじゃねえか……」

「いずれ後悔する事になると思うよお……僕はさあ……」

「んだあとお！悟！おめえは弟の癖に毎回うるせえんだよ！」

蒼の顔が一気に目覚め怒り顔になる

「んなあの関係ないだろ、僕は正しい事を言ってるまでさ」

兄弟は小さい事で喧嘩するほど仲良くなったようだ……

「しかしまあ……毎日が平和だなあ……」
「特に何もおきてませんからね……」「戦争とかに参加するか？」
「ただの人間達の戦いに参加するなんて駄目ですよ……」

好戦的な考えの蒼を彰人がなだめている。

「つまんねえな……人を襲う妖怪も少なくなってきたしよあ……」
「ふっ、修行の一環として退治しまくったからな！」
「父さん……大声で言わないでよ……」「すまぬ……」

なんと言うかカンと言うか……至って平和である……
この平和が長く続けばいいものを……

「暇なら幻想郷に行きませんか？そろそろもつ……」
「だ……駄目……絶対……」「と、父さんが……」
「俺達がまとめて戦っても勝てない親父が恐怖してやがる……」

覚はこの世の終わりと言うような顔をしている……
体の震えが止まらないようである。

「だから……幻想郷には帰らない……絶対に！」
「親父……」「父さん……母さん達には攻撃ができないみたいだし
ね……」
「父さんはお優しい方ですからね。」「「そういう感想か……」」

平和……何事もない平和……一言で凍りつく平和……
覚の息子達三人はほのぼのとしていた……

『俺っちの存在意義……ん？あ、兄貴い……』「ん？」
『玄武の力……』「んん？」『玄武の力を感じるっス！』

「げ、玄武の力だと！げ、玄武といやあ……………はっ……………」

【見つけたよ覚君！やっとなね！】

「なっ、ま、まさか本当に！」

「見つけたんだよお！やっとなね……………やっとなね！」

朱雀の力を持つ青年……………覚は玄武の力を持つ見た目は同年代の女性にであった……………

そう、それは見覚えのある人間であった……………

「はっ、春香ああ！？」「」「誰？」「」

次回に続くよ！

『出番……………少ないのは……………』

「そろそろこの次回前シーンもカットかな……………同じ事ばかり言うてるし」

『そ、そんな！殺生な！』

続く！

第十九話 1 + 1 2

覚は混乱していた……なぜここに春香がいるのか……
なぜ玄武の力を持っているのか……

（なぜだ……しかも……俺に息子がいて何人にも手を出した事を知れば……

朱雀と同等ともいえるほどの力……玄武の力を持つ……

春香と戦う羽目になるのか？嫌な予感しかない……いやな予感しか……）

覚の悪い予感は当たる

「やっと見つけたよ……覚君が事故にあって死んじやってさ……つい覚君追っっちゃったら

玄武の力をあげるなんて亀みたいな奴に言われてえ〜過去に飛ばされちゃってね……

それでもってね、この式神の賢次と一緒に今まで生きてきたんだけどね……

でね、朱雀の力を持つ男がいるとか言う話を聞いてね……絶対覚君だっと思ってね

でね、覚くんの事をずっと探していたんだよ！」

（な、長い……この作品始まって以来の長さだよ……何なんだろうかな……この……

と言っか、よくわかるようでわからないような説明ありがとっございまして……

なんと言っか……長い間俺探してたみたいね……予想が当たりそっくだよね……）

覚の心の叫びも長い

「え、ええと……説明聞いてもあんまりよくわからなかったんだけど……」

「な、なになんだよ、あの女は……」「私にもよくわかりませんよ……」

息子達が春香が何者かわからないので話し合いをしている……

(いつもの展開じゃないか……このパターンはヤバイ……)

覚の悪い考えはあたる

「んん？その後ろの人たちは何かな？何なのかな？」

「ウエ！え、ええええと……」「息子だよ息子！」

「へ？」

春香の目が点になった……

(なんてことを言ってくれたんだ蒼……)

これは、覚嫌な予感が的中してくれる事間違いない

「そうかあ……覚君……長い間に結婚しちゃったんだね……」

「あれ？」「仕方ないよね……会わなかったからね……」

「許してはくれるのか？」「しょうがないよ……」

「そ、そうか……」

覚は安心して少し上の空になっていた……それがいけなかった。

「で、君の母親どんな人なの？」

蒼にそう聞く春香……覚は油断していた……
一番初めに危惧していた事を忘れて……

「俺の母ちゃんは大妖怪って言うくらいの実力者かな」

「僕の母さんは発明大好きな河童ですよ」「あ、私の母さんは狼天狗です」

「……なにかな？君達……みんな……親違うんだ……」

そのとき覚は殺気を感じた……
そう懐かしくも恐ろしいものを

「さ・と・し・く・ん？」「どうした……」

(何だこの殺気は……)

「覚君でさあ……愛する女は一人に決めるっていたったよね！」「あ、
ああ……」

「何でこんなことになってるんだよおおお！」「えっ、えええええ！」

何だ、何があったんだ……凄く怒っている……凄く怒っている！

「許すって言ったのに〜！」「内容が違いすぎるんだよ！」

(後ろから出てくる濁流のようなものは何なんでしょうか……)
「うっ、うおおお、死ぬわけにはいかねえええええ！」

覚は朱雀の力を最大限に使い、瑞穂の玄武の力を最大に使った攻撃
を止めようとする

「な、なあ……親父達やばくねえか?」「や、やばそうだね……」
「大丈夫ですかね……」

覚の息子達がそう言った時……覚と瑞穂の攻撃が衝突した……

『朱雀と玄武の力が……』 『衝突するんだな……』 『予想してな
かったな俺たち……』

力と力が衝突したその後……
覚達の姿形はその場になく……
荒れた森が残っただけであった……

第1章 完

第2章に続く……?

17・5話 うちの三兄弟(前書き)

番外編 一

17・5話 うちの三兄弟

覚の暴走により修行のたびに出る事になってしまった三兄弟
そんな三兄弟は今日もおっぺけ……

「ところで「おっぺけ」って何だ？」『知らねえすよ………』

「てえいおりやああああ！」「あまい、あまいぞ、蒼！」

覚は蒼との格闘戦闘練習をしていた……

覚は蒼の攻撃をことごとく避ける

「あますぎる！あますぎるのだあ！」「ううわあ！」

覚は一撃で蒼をノックアウトする

「お前は力任せすぎるんだよ……蒼……俺にも紫にも似てないな……」

「つう！俺は俺だからいいんだよ！能力さえ自在に使えりや……」

「お前は力を扱うにはまだ未熟……」「……」

蒼の能力は覚が見たところ危険すぎるので制限がかけられている
紫は気にしていなかったのかどうかは知らないが一応制限がかけられていたものの

それ程のものでもなかった……覚は紫の考えが少しわからない。

「蒼の能力は危険すぎる……ですか」

「紫さんの能力とか見てると用意に納得できるけどさ」

後ろでぼそぼそ声で彰人と悟が会話している

「ちっ、お前らはつまり事扱えるからって調子に乗りやがって……」

「それは関係ないと思うけどなあ僕」「私もです」

「んだとお?」「兄弟喧嘩はよせ……」

二人に言いかかる蒼をなだめる覚

「でもよお……」「まあお前がもう少し、使い方と言うものをわかれば」

「……」

蒼は覚の言葉を聞き先ほどまでとは違い黙り込んでしまった

「ありやりや、蒼の奴黙っちゃったね」

「蒼なりに何か考える事があるのでしよう」

「……ふんっ!」

二人の話を聞いてか蒼は怒り顔でどこかに行ってしまった

「わかってくれればいいんだけどなあ……」

去っていく蒼を見ながら覚はそう呟いた

それから数時間後

「と言うわけでだなあ今日はお前らが飯を作る番なのだよ。晩御飯だけに」

「晩……」「ごはん……」「だとお？」

覚の突然の言葉に息子達は驚く

「だって今まで一度も作った事ないし！父さんのご飯が食べれないなんて！」

「突然すぎませんか？」「そうそう、いきなりすぎんだろうがよ！」

そして文句を言う息子達。そして

「いいから作ってみろよ。拒否権はお前達には無い」

「……わかりました。やってみましょう」

「何いつてんのさ彰人！父さんのご飯が食べられないなんて！」

「うるさいですよ、悟。煩いのは蒼の役ですよ」

「うー」「俺はいつも煩いつてかよ、おい」

覚の言葉の何かを彰人は理解したようだが他の二人は何も理解していないようだ。

覚の料理が食べれないと言う事を聞き悟はかなり暴走している。

「……んじゃ調理開始！」

覚の合図とともに調理は無理やり開始された

「これをこれと混ぜりゃうまいんだよ」

「いや、うまいものとうまいものを混ぜればうまいと言う理屈はお

かしい」

「父さんのように料理を作ればいいのさ……」

三人は自分の思う道理に料理を作っている

「分ってくれてないなあ……彰人は少しは分ってくれているようだが」

（兄弟で協力すると言う事を学んで欲しいんだがなあ……）

それからではあるが彰人のまとめにより何とか協力する事を始めた

「いや、だからですね！砂糖と塩を間違えないでください！」

「んなの気にしてられるかよ！」「父さんの作ったように……」

「……」（結局まとまりはなしかあ）

今日もうちの三兄弟はおっぺけ〜

次回に続く

17・5話 うちの三兄弟（後書き）

ストーリー評価とかはなかなかあがらないものですね
文章とか色々編集しましたが

14・25話 鈍感男だ蒼だ（前書き）

蒼短編。 ちなみに読みは【蒼・そう】

14・25話 鈍感男だ蒼だ

「で、親父つてどんな人なの？」

「自由気ままな人よ、でも流されると流される人よ」

「ふうん……」

俺は親父を見たことがない。親父は当てもない旅をしているらしい。しかもおふくろと違う女性とだ。

しかしすでに親父はほかの女にも手を出している……

いや、だされたらしい。

親父は強いらしいが女性に弱いらしい。本当に強い男なのか？

いや、幻想郷最強というか妖怪最強と言われるおふくろの旦那だ。雑魚なわけがない。

「親父と戦つてみたいなあ」

《でも作者さん戦闘の苦手だからカットよ》

「ん？今何か変な声が出たような？」

しかし周りにはおふくろ以外いないしおふくろもなんか眠たそうだし、気のせいだろう

「この世で俺に勝てるやつなんざあ、そんなにいねえからなあ！」

《自分の強さを信じてやまない。しかし蒼はまだ井戸の中にいる蛙である》

「蒼様……あれ、紫様はまた寝ていらっしやるようですね」

「ああ、藍か。そんなの何時ものことだろう」
「困ったものですね……」

おふくろの式の藍。

式については詳しくないのでよくわからないがおふくろの従者だ。

「何もかも今さらだぜ。藍、お前には本当に苦労かけるよ」

「いつ、いえ！従者としての仕事ですから……」

欄の顔が少し赤い。風邪だろうか？ふっ、世話をかけさせてくれる。

「顔が赤いじゃないか。風邪か？どれ」

「わっ！な、何をするんですか?!」

「熱いな、熱があるようだし寝ておけ。看病してやるからよ」

《そして藍を蒼はお姫様だっこする》

「にゃ！なにをするんですか！」

「なにつて、運ぶんだろ。蒲団までさ」

《そう言つと藍は何も言わなくなり、蒲団に連れられて行った》

「ん、んん……」

《母親である紫を放置したまま》

彰人短編に続く？いや、次は彰人短編です。

14・25話 鈍感男だ蒼だ（後書き）

こんな恋愛に鈍感なキャラ書くのはあんまり好きじゃないなあ

14・32話 彰人のあこがれへの道(前書き)

彰人・あきと はまア読み仮名つけなくてもいいですよね。

14・32話 彰人のあこがれへの道

「父さんはどのような方だったのですか？」

「立派な人ですよ。この世にあの人以上の人はいませんよ」

「ほお……」

その話の後、母さんは用事があるようなので少し出かけた。それにしても母さんの話を聞けば聞くほど父さんに会いたくなくなります。

しかし今は父さんは母さんの親友と旅をしていると言います。

何でもその人の父親に頼まれたとか。

何でも嫁にしろと言われて一緒に旅をするように言われたとか。

母さんはそれでいいんでしょうか……と聞いたところ

『にとりならいいんです』と言っていました。

母さんは本当にやさしい人です。

「本当に父さんとはどんな人なのでしょうか」

「ただの天然ジゴロと言うものなんじゃないですか？」

「えっ！？文さん！いきなり出てきてなんですかいきなり出てきて失礼なことを！」

母さんの同僚だと言う『射命丸 文』さんが突然話しかけてきた。突然父さんを侮辱するような発言をするのでつい怒ってしまった。

「だってえ、気がつかないうちに女性を何人も惚れさせてるじゃないですかあ」

「それは父さんが誠実で真面目で強い人だからですよ！」

「そう言うのが天然ジゴロであるための必要要素の気がするんですがねえ」

《関係ないが作者は長島茂雄さんみたいだと言われたことがあるぞ》

今何か聞こえたような気がしますが気にしてはなりません。

それにしても天然ジゴロの要素ですって？

どんな理由やら要素やらいわれようと

誠実な父さんがジゴロと言われるのは心外な話ですね。

《その時とある所》

「ぶえつくしよい！」

『どうしたつすか？兄貴』

「いや、何かだれかがうわさをしていたような……」

「父さん！風邪ひいてるんじゃない！大変だあああああ！」

「大変なのはこっちだよ。悟がまた暴走したよ……」

《そして再び彰人達の方へ》

「まあ、そういうことですね。父さんの侮辱は」

「別に侮辱ってわけでもないんですがね」

「ジゴロが侮辱じゃないとしたら私もジゴロになってやりますよ！」

「へ？」

「ええつと……おほん。文、私はあなたのことが大好きですよ？多分ね」

「……え、それがあなたのジゴロ像なんですか？」

《文の顔は変なものでも見たような顔だ》

「あのですね、それはタダの軟派な男なんじゃないでしょうか」

「え？違つんです？」

「違いますね。そんな男が天然ジゴロであつてたまりません」

「何か言葉遣いおかしくありません？」

「お互いさまと言うものです。さて、私は用事がありますのでこれで」

「あ、はい……」

《そう言つて文はその場を去つて行つた》

「……何なんでしょうね、天然ジゴロつて……きっと誠実な人のみ
がなれる境地ですかね」

《そして彰人は天然ジゴロを目指すこととなる》

続くが悟編の短編はないよ

14・32話 彰人のあこがれへの道（後書き）

悟短編はないっす。書いてほしいです？ないですよね。

覚の息子たちの設定（前書き）

その他オリキャラの設定は外伝終了後くらいに
それにしても感想も評価も変わらねえなあ……

もつと頑張らなくてはね。

面白いと思っている人が一人もないということにもなるし
頑張りまっせ！

覚の息子たちの設定

東龍 悟 (とうりゅう さとる)
にとりの息子

【一人称】

僕

【能力】

水を物に変える程度の能力
水をどこでも出現させる程度の能力

父親である覚の能力とにとりの能力を合わせたような能力
精神力が尽きない限り水を出すことができる
さらにその水を武器や家具などという物にすることができる。

【容姿】

髪の色はダークブルー | 髪型はポニーテール
顔は目がにとり似それ以外は覚似
肌の色は色白
見た目年齢20歳程度

【性格など】

表面上は普通の青年だが、裏ではいろいろなことを考えている。
極度のファザコン。一定期間たつと暴走する。
河童のとりの息子だが覚と旅をしている間に
人間の愚かさなどを見たために認めたもの以外の扱いは悪い。

見たことがないものにはかなりの興味を示す。

【スキル】

機械に関してかなりの興味を持ち、いろいろなものを作ることができる。

料理に関しては外伝にてかなりの腕があることを披露している。

17・5話では料理が下手なように見えていたがあれは蒼の暴走によるもの。

東龍 蒼 (とうりゅう そう)

紫の息子

【一人称】

俺

【能力】

不明

危険すぎるらしく覚により使用制限を受けている。

【容姿】

髪の色は黒 髪型は短髪

顔は紫似

肌の色は色白

見た目年齢18歳程度

【性格など】

自分の思いどおりにならないとイライラする
自分の力を存分に使いたいと思っている。
なおその力を感じる方法は何かを壊すことだと考えている。
父親、母親以外は自分より格下だと決めつけている。
使えると認めた相手には優しい。

【スキル】

皆無

強いて言うなら破壊スキルSランク

東龍 彰人 (とうりゅう あきと)

椀の息子

【一人称】

私

【能力】

相手をお願いをする程度の能力

意識した相手をお願いをし、そのお願いしたことをできなくさせる
詳しく言うと『空気を吸ってちゃんとはいってください』と言つと
空気を吸って吐くことができなくなる。

なお、効果は意識を失うまで。なお否定形では効果は出ない。
ちなみにこの能力は彰人の精神力が尽きると効果がなくなる。
彰人が気を失った場合もそれに当たる。

【容姿】

髪の色は銀髪 髪型はサイドポニー
顔は覚似 だてメガネをかけている。
肌の色は色白

見た目年齢20代後半程度

【性格など】

穏やかな性格。だがキレると手がつけられなくなる。
父親である覚の言うことを信じており疑うことをしない。
なお、正義と言う言葉をすごく毛嫌いしている。
なおこれは父親である覚の教育によるものである。
なので正義だの悪だの言う人物は大嫌いである。

【スキル】

料理は悟より少し劣る程度のレベル
剣術は世界最高峰レベル
信じている人を疑わなすぎる

ちなみに覚の息子たちはそれぞれ微妙に違うが、合成の力を持って

いる

これは能力とは違うものであり通常時に普通に使えるものではない。
ある一定の条件時に使用可能となる。

この能力で死者を他の生き物として蘇生することも可能である。

覚の息子たちの設定（後書き）

ちなみに長男は彰人・次男は蒼・三男は悟

息子たちの嫁の設定(前書き)

暫定的に確定している人物のみ

息子たちの嫁の設定

東龍 とうりゅう 真央 まお

悟の嫁

【一人称】

相手によりいろいろ変わる
たいていはボク

【能力】

5分以上触れたものを複製する程度の能力
5分以上触れた生き物に擬態する程度の能力

ロストギアの真央との融合により取得した能力。
複製する物により複製にかかる時間が違う。
擬人化は声・能力を完全に同じにした状態で擬態する。
が、擬態した相手の能力の使用は体力を多く消費する。

【容姿】

髪の色はダークブルー

それ以外はアリシア・テストロッサの体を基としているため
アリシア・テストロッサが成長した姿そのものである
ちなみに20歳ぐらいの容姿

【性格など】

体はアリシア・テスタロッサの物ではあるが
精神などはすずかの家にいた猫の一匹である
悟第一主義であり悟の言うことを優先する。
なお悟限定の でもある。

猫時代から悟にべたばれである。

悟により人間となつてからはさらに惚れ直している。

なお悟の血を使った融合により悟が死なない限り死なない。
名前がなかったため融合した真央の名前を使うことにした。

【スキル】

永遠の新婚レベルS

IF編 ハロウィン特別編 その巻(前書き)

ifストーリーであり実際にこの様な感じになるかは定かではない。

IF編 ハロウィン特別編 その壱

「今日はハロウィンだ」

「ハロウィンだねえ」

ここは幻想郷の紅魔館。

覚は息子の悟と普通に通路を歩いていた。

「今回はパラレル的な話だから普通に紅魔館をのびのび歩いてるわけだが」

「メタメタだねえ」

そんなこんなでとぼとぼと歩いていると。

「お、にいちゃんたちいいいいいいいい」

「グオファア!?!」

「父おおおさああああん!」

後ろから来た館の主の妹『フランドール・スカーレット』の突撃である。

覚は突撃を食らったため口から血を吐いた。

別にすぐに再生できるから死なないが普通の人間なら即死である。

「フ、フランちゃん? そういうの危ないからやめようって言ったよね?」

「そんなの知くらない」

「き、気にするな……悟。大丈夫だから、問題ないから」

口元の血をふきながら覚は立ち上がり、フランの頭をなでる。

「……フランちゃんだけずるいなあ」

「悟にはボクがいるよおおおおおおおおお！」

「グオファアアアア！」

「悟ううううう！」

悟が覚に抱きつくフランをうらやましがっていると後ろから真央が走りながら悟に抱きついてきた。

「悟には僕がいるから羨ましがする必要はないんだよあ」

「こ、こっちじゃないし……ガクッ」

悟はその場で倒れてしまった。

その上では嬉しそうにしながら抱きつく真央がいた。

「ご愁傷さま。我が息子なら難儀なものだ」

「？」

頭の上にフランを乗せた覚は目の前の惨状を見て眩く。

「ところで、ハロウィンってなあに？」

「おやおや、知らないのかあ。まあ、ずっと閉じ込められてたのもある」

495歳じゃあ参加するってのもどうかと思つが俺からみればまだ子供」

「なんかよくわからないよあ」

「いや、まあ子供が大人からお菓子をもらつ日のことかな」

「そうなんだあ！」

頭の上で喜んでいるフラン。

少し動くので覚は少し痛い。

「よいしょっと……てな訳で今日は紅魔館のみんなにお菓子でももらいに行こうか」

「でも何時もおやつのお時間にやっもらってるよ？」

「気にするなよ。ハロウィンは夜からが基本だしフランも本格的稼働は夜からだろ？」

「そうなんだ！うん 行こう行こう！」

そして覚はフランと手をつなぎながらキッチンへと向かった。

「え？お菓子ですか？」

「トリック・オア・トリト」

「お菓子くれなきゃいたずらするぞお」

困る咲夜を無視して覚たちはお菓子を求め続ける。

「え、ええと……」

「いたずらするぞお」

「するぞお」

どンドンと追い詰める覚とフラン。

「今日の分はいつものお時間……」

「いたずらするぞ？」

「しっちゃしゅぞ？」

手をわしわしとしながら近づいて行く覚。
フランも手をわしわしとしながら近づく。
このままお菓子をくれなきゃ二人からのいたずらが咲夜を襲う。

「フラン！イタズラだ！」

「うん！」

「え、えええと。今すぐ用意しますのでお待ちください！」

そう言いながら昨夜はその場を急いで離れた。

「……用意しないものだと思ったのだが。つまらん」

「？お菓子作ってくれるならいいんじゃないの？」

「いや……なんていうか……」

覚はすごく残念そうだ。

「レミリア〜トリック・オア・トリト〜」

「おかしくねなきゃいたずらするぞお〜」

レミリアの部屋に二人は突撃するが部屋にレミリアの姿はない。

「「あれ？」」

「お嬢様なら神社の方に向かわれましたよ」

咲夜が二人にそう答える。

「あのレズが……」

「レズ？」

「フランちゃんは関係ないね。ところでフランちゃんはだれが好きだ？」

「え？覚お兄ちゃんだよ？」

「なら完璧に関係ないね」

そんなやり取りをしている二人を見ながら
やれやれと呟く咲夜がいた。

続く

IF編 いい夫婦の日編 壱(前書き)

本編とは前回とは違いました。たぐの無関係です。

IF編 いい夫婦の日編 壱

「11月22日。通称いい夫婦の日と言われている」

「そう言われているらしいな」

そう答えるのは覚。それを問うのは悟。

「お前はもう助かりそうもない状況だ」

「もうくつついてるからねえ」

悟の背中には真央がくつついている。

別にいつつもくつついているが今回は尋常ではない。

「私たちほど最高の夫婦はいないんだよお」

「や、やめてくれないか！いつもいつも……気持ちいい感触がああ

ああ！」

真央はでかいからな。

「まあいい……俺は逃げるぞ」

「母さんとかに会うつと恐ろしいんだね」

「いや、にとりというより……」

「言うより何なんですか？」

突然と隣に彰人が現れた。

「いや、お前……これを理由にお前らの……」

「お師匠様」

「おや？母さん」

「ああ、いたんですね彰人」

覚を見つけ走ってきた椋。

「まあ、今日は父さんに会いたいと思ひまして。用事で少し遠くに行くと言えようと」

「そうですか。あれ？お師匠様がない！」

「え？あれ？」

そこに覚の姿はない。

はたして覚はどこに行ったのか……

「むぐう！むぐむぐう！」

「うふふ。今日はいい夫婦の日と言つらしいわね。つまりは正妻である私とあなたの愛を祝う日よね」

「むぐむむ、むぐう！」

覚の前には紫がいた。

覚は口に布。腕と足に紐と言う逃げられない状態だった。

「そんなに喜ばなくてもいいのよ？」

「むぐむぐむぐう〜！」

覚は「祝うだけならいいがこの状況はいい夫婦の人関係ないだろ！」と叫んでいる。

「さあて、おいしい料理でもいただいでくれるかしら」

そう言いながら近づいてくる紫。
尻だけある気で逃げる覚。

「なんで逃げるのかしら？」

スキマで覚の後ろに現れる紫。

好きな女に手を出せない覚にはどうにもできない。

「さあて……じゃあ、いただきましょうか」

「むぐううううううううう！」

《バッダアアン！》

「独り占めは禁止なんだよ！」

「その通りです！」

突然と現れたにとりと椀。

急展開にもほどが……

「くつくく。この覚レーダーがあれば覚を見失うことはないよ！」

何時そんなものを作ったのか。

そんなものが存在すれば覚は逃げることと言っ行為が無意味となる。
IFだから別にいいのだろうか……

「と言うわけで……一番はわたしだよっ！」

「私です！」

「正妻のあたしに決まってるでしょー！」

覚の地獄に近い天国は間もなく始まるうとしていた……。

「ここに父さんがいるのですか」

「まあ、いるんだけどさ……僕が言っておくから言ってくれば？いい夫婦の日で奥さんと旅行なんですよ？」

「しかし、私から言うと言うのが筋ですよ」

「……僕は知らないからね。じゃあね……いい加減離れてくれない？」

「いや！」

「……」

背中に真央をつけながら悟はその場を去った。

「さて、この家に入りますか」

そう言い扉を開……

途中で開くのをやめ、書置きを残し彰人はその場を去った。

続くわけではない。

でも要望があれば作ることもないことはない？

IF編 いい夫婦の日編 壱（後書き）

感想よろしくお願ひします 後評価なども 励みになります。

その1 美鈴って名前は紛らわしい

【????】

「あいてて……どこだここは？」

覚は眼を覚ました。

春香の怒りの攻撃を防いだとき何かが起こった。
そして気が付いたらここにいた。

「ここはどこだ、炎……歌？」

周囲を見渡すが自分の式である演歌の姿はない。

「悟〜蒼〜彰人〜！」

息子たちの返事もない。

「どづいうことなんだ……」

《ムニユ》

「んあ？んああああ！？」

周りには誰もいなかったが覚の下敷きになっていた
女性がいた。覚好みの女性である。

「いけねえ、いけねえ！また大変なことを……」

そう言いながら覚はあわてて女性から離れる。

「大変なことなんて特に何も起きてないよ」

「えっ？」

聞き覚えのある声だった。

かなりの年月がたつても忘れることのない声の一つ

「美鈴？」

「そうだよ。美鈴だよ。でも今は美鈴じゃなくて美鈴だけだね」

「美鈴？」

美鈴は自分は美鈴と名乗った。

しぐさや言動などから覚は本人だと認めた。

「あの事件でお兄ちゃんが死んじゃった後にね。私もあとを追っちやっただ」

そしたらね。青龍だつて言う人がね新しい人生を用意してくれた上に

お兄ちゃんと一緒にさせた上げるって言ってくれたんだよ」

「青龍か……朱雀に玄武……しかし白虎は俺とかかわりを持っていない……」

「んふふ〜お兄〜ちゃん」

「ぎゃっほい！」

美鈴は覚に体を押し付ける。

「ぐ、な、何をされるですか？美鈴さん？」

「グフフフ 今までできなかったことをするだけだよ」

「え、いや、ちよっ！」

教えてくれ炎歌。あと何回俺は流されればいい。

朱雀の力は何も教えてくれない……

『あれが再び繰り返されると言っつすか！また最後だけの日々が！』

続くらしい

その1 美鈴って名前は紛らわしい(後書き)

紅魔館の門番さんはこの作品では別の人に差し替えようと思ってまふ。

2章 更新が遅れることについてのお知らせ

この作品の前日談である【普通に暮らせない青年】をぼちぼち更新していききたいと思うので

そちらである程度話ができたならこちらを更新していききたいと思いません。

こちらの作品を進めるためにも。と言うわけでご了承くださいますようお願いいたします。

これ200字まで入れないと投稿できないんですよねえ……

つまりは読める程度の話を書けと言うことですかね。

それよりも最近いろいろ読んで出思っんですがOPをつけるのが流行っていたり

妄想CVとか考えるのも流行ってます？

なら自分もキャラにCVとか考えたりした方がいいんです？

ですと……どうなんですかね。

後キャラの会話前に名前書くのってどうなんですかね。

自分はそんなの書くなつてマジギレされて書き方を変え始めたんですがね。

でもそういう書き方している人も多い気がするんですが……

後、自分の書く小説は三人称が基本ですがどうなんですかね……

おや、もう200字超えてるんじゃないですかね……まあいいですね。

これ以降は活動報告とかで書こうかなと思います。では。

来年へ向けての抱負

【年末】

「年末です」

覚は無表情でそういう。

「ほんのあと少しで正月だけだね」

悟はのほほんと答える。

「そうだな。作者も無謀なことするなあ」

来年まで後30分で話を書こうとしている

「なので書けません！」

ここで作者さん登場。

「ひらきなおっちゃった!？」

「なので来年から本気出す！」

来年もよろしくお願いします。

この作品及びた作品を頑張りたいと思います。

『来年もよろしくっす』

今年も最後の炎歌でした。

続く……何に？

新年の信念

【信念】

「新年は頑張るといふ信念で行きます！」

「寒いよ作者さん……」

「はい……」

「新年です。お年玉なんて上げません」

「……なんだってええええ！」

覚の言葉に息子達は驚いた。

「な、なんでだよ父さん！」

驚いたという形相でつみよる悟。

「年齢を考えてください年齢を！」

覚が現実を息子達につきつける。

「いや、んなの……見た目的にまだ俺ら子供じゃん？」

「お前達は一人でも生活できます！」

覚の現実はまだ息子達に突き刺さる。

「でも……」

「あきらめましょう。父さんの言うことはもっともです」
「あ、彰人……」

なよなよ言う二人に近づき彰人が言う。

「そもそも奥さんがいるんですから自分で稼ぎましょう」

もつともな話であった……

20分では話が思いつけないわ……

セツトヴァルエンチン

「今日はバレンタインだよ」

「そ、そうだねえ……で、なんで自分をチョコでコーティングしてるのかな？」

「悟が僕を食べちゃうの」

真央は悟にチョコレートまみれになりながら接近していた。

「いや、僕は父さんにチョコレートを渡すんだ……」

「なら僕を食べてからにしてえエエエ！」

「うわあああああああああ！」

「バレンタインだからって番外編やらなくてもいいのになあ……」

「何言ってるの？」

「いや、なに……で、美鈴はそれがチョコかな？」

「うん。自信作だよ」

「ああ、もらおう」

特に何もなくおしまい……

その2 イベントきっかけで久しぶりに(前書き)

なんかいろいろあってノリノリだよ。
詳しくは活動報告で。

その2 イベントきっかけで久しぶりに

「なんか久々な気がする……」

「何が久しぶりなの？ お兄ちゃん」

覚の言葉に美鈴は疑問そうに聞いてくる。

「人生いろいろあるのさ」

「そうなんだあ」

そういうことで結論が付いた。

「しかし何も無い……続くのは木々だけ……」

「ここってどこなのかな？」

「並行世界や異世界……いや、あの時に春香と俺の攻撃が衝突したときに何かが……」

「春香ちゃん？ それってどう言う……」

覚の言葉を聞いた途端すいと

「……いや……何も……ない……」

「何かありそうな感じの顔してるけど」

覚の言葉がとぎれとぎれなのですごく疑問そうな顔で近付いてくる美鈴。

「何も無いんよ何も……」

「隠し事できないんだね。……何があったの？」

「あう……あうあうあああああああ！」

覚が美鈴に再び問われた時突然壊れたかのように叫びだした。

「お、お兄ちゃん!？」

「はぁ……はぁ……はっ！俺は何を！」

「本当に一体何が……」

「いや、もう言う。実は……」

そして覚は覚悟を決めた。

「そんなことがあったんだね……」

「ハイソynaコトガアリマシテン」

「なんでカタゴトなのかな」

(なんか知らんがにとりの怒り顔が頭に浮かぶんだよなぁ……)

覚は恐妻の脅威から逃げられない。

(友達の娘に手を出したのが運の尽きっていうあれなのかなぁ)

覚は無言で涙を流し始めた。

「よくわからないけど、大丈夫だよ。私は何も言わないよ」

「美鈴……」

「なぜなら本妻は私だから」

「……無解決……」

にとり以外にも紫が不敵に笑うシーンが安易に想像できた……

《ドドーン》

「つうえ！？　なんだ今の爆発音！」

「多分あれだと思うよお兄ちゃん」

「あのバカでかい怪物か！？　妖怪ってレベルじゃねえぞ！」

目の前には暴れる妖怪がいた。

「なんかこつちに来てる気がするけど」

「えー！　面倒な話じゃねえか！」

「まあ、逃げるまでもないかもだけど。倒したら体液とかで汚れそうだね」

「いや、格闘で戦おうとするからそうなる」

そう言っつて覚は手を前に構える。

「弾ける怪物があー！」

覚がそういつた瞬間怪物の周りに見えない壁が生まれる。

《ブツシャーン》

そしてその壁の中で妖怪ははじけ飛んだ。

「結局壁がなかったらいい体液まみれだったと思うよ……」

「……ですよねー。しかし炎以外が見たいと言っつた炎歌がいないとはなあ……」

「お兄ちゃんの式だったね。そう言えばあたしにもそんなのがあるはずなんだけどなあ……」

《ドローン》

「……………うん」

「ねえ、お兄ちゃん。まだまだいるっぽいよ」

「……………こうなりやあけよ！ 炎歌には悪いが新技オンパレードだ！」

そう叫ぶ覚の前には妖怪の集団がいる。

「凍りつけ！」

そう言うと妖怪の一匹が凍りつく。

《ズカーン》

そして凍った妖怪に別の妖怪がぶつかり凍った妖怪は粉々になる。

「しかしこの効果音はどうにかならんのかね……………」

「効果音？」

「気にすんな。とおりやあ！」

覚の手にエネルギーの球ができる。

そしてそれを向かってくる妖怪に投げる！

「うおおおおおおりやあああああ！」

そしてそのエネルギー球にめがけてキックをする。

「碎け散れえええええ！」

そしてその球をけり飛ばすと化け物は砕け散った。

「どこかで見たことのある技だよ……」

「古いつてか……今時の行くぜ」

そう言っつて携帯電話らしきものを取り出す覚。

「始動準備OK。始動開始！」

そう言っつと覚は常人には見えないスピードで動き出した。

「時間終わり！」

そして覚が現れた途端に妖怪は爆発して消えた。

「どうよー！」

「あんがい古いよそれ」

「そうけ……」

「もはや何でもありだったね……」

「ああ、もはや何でもありだ」

長年の結果により朱雀の力の使い方をわかってきた覚はいろいろな技を試した。

多分大体のことはできるが疲れたらどうしようもない。

「と言っつてもあんまり疲れるきざしねえけどな……」

「突然何を……」

「しかしここらにはこんな妖怪がわんさかいるのかな……」

きよろきよろと周りを見る美鈴と覚。

「すごいわね貴方達……」

「ん？ 人か？」

そこには人が立っていた。

「私の名前は八意永琳。あなたたちは？」

続く

その2 イベントきっかけで久しぶりに（後書き）

朱雀・玄武・青龍の3つの力が出てきたがそれぞれにはいろいろな特性もある。

ちなみに白虎は都合上出る予定はない。

朱雀は攻撃的なものなら何でもできる。

料理等はもともと覚が作るのがうまいだけ。

合成の力などは覚は得意なものではないので使いこなせはしないがある一定の規定を超えると使える。

他には材料さえあれば何でも作れたりする……

さて説明はこれくらいでいいか……

詳しくは活動報告の方とかでね。

コラボ（17・6話） ユニコーンデストロイさんとのコラボをこちら側視点

この話は時系列的に17・5話よりあとで18話より前の話になります。

ユニコーンデストロイさんの方ではパラレルらしいです。

なお、こちら側視点と書いてはありますがなんとなく内容が少しこの小説に合うように変更されていますがご了承ください。

凌駕のセリフだけは変更はありません。

幻想郷から旅立って幾年。

人を襲う妖怪を退治しながら旅をしていただけだ。

「父さん。ほら、教えてもらった料理を作ってみたよ！」

「そうか。どれどれ……」

悟の作った料理を覚はおいしそうに食べていた。

「ところで親父よ。唯一無二の存在になるって目的だったよな」

「ああ、確かそんな設定だったな……」

「そんなって……」

なおそんなこと作者さん本人すら忘れ去っていたことだ。

「まあ、そんなこと気にしてたらこの先、生きてけないぞ」

「父さんの言うとおり！ この先生きていくにはすべてを本気にしちゃいけない！」

覚と悟はすごい笑顔だ。

「こいつら……」

「まあ、父さんにはとりさんから逃げるためにああいっただけなのはわかりきったことです」

げんなりする蒼の肩を叩きながら慰める彰人。

「それよりも、今日の料理当番は悟じゃなくて蒼ですよね？」

「いいんじゃないか？ もう悟が作つたら」

「どう見ても父さんの分しか作っていませんが……」

彰人が指をさすと確かに覚の分しか作っていない。

「……ああ、そうか……つたく」

そう言つて蒼はその場をたつた。

「遅くなりそうですから私も手伝いますよ」

そう言つて彰人も蒼について行つた。

『ところで俺っち出番なしっすか？』

【数時間後】

「父さん。なんか二人が帰つてこないんだけど」

「ふむ……あいつらが何かに襲われていることは考えられんが……」

帰りが遅い二人が心配になつた覚達は二人を搜索することにした。

《ガサガサ……》

「父さん。ここになんかあるよ」

「ん？ なんだこの鏡みたいなのは……」

なんか鏡みたいなものがある。

作者さんよく知らないからどんなにかわかない。

「なんか興味がわくね」

「悟……お前の興味があるものにすぐに手を出す癖は……」

そう言っているうちに悟は鏡に触れようとしている。
その時。

「うわわわっ。何これ吸い込まれっ！」

悟は吸い込まれていった。

「これに全員吸い込まれたというわけか。ふむ……」

目の前で三人が吸い込まれたというのに覚は落ち着いている。

「ま、大丈夫か。よし、俺も行くか！」

そう言って覚も鏡の中に入って行った。

【鏡：出口】

《トッ》

「さて、到着」

「あ、父さん！」

「親父！」

「父さん。来てくれましたか」

覚が鏡から出ると息子たちが近寄ってきた。

「無事だったか息子たちよ」

「おい。あんたら何もんだ？ どうして白銀の鏡から現れたんだ？」
「ん？」

突如、誰かが覚に話しかけてきた。

「誰だ？ あ、なんでかっつてのはなんか鏡があつたから入ってきた」

（しかしこの男……暑苦しい……）

すると突然そつが大声を出した。

「おい！ そこに居るのはお袋か！？ 何でこんなところ居んだよ？！」

蒼の視線の先には紫がいる。

（服装が違うような気もするんだが……確かに紫だ……奴は幻想郷にいるはず……しかしここは俺の知っている場所幻想郷ではない……）

「紫。お前子供居たのか？」

男が紫に質問している。

「何言つてるのかしら？ 私は生まれてこの方殿方と夜の営みをしたことないわよ？」

(嘘を言ってるようには思えんが……聞いてみるか)

「おい紫！ 人を襲つといてそんなことをぬけぬけと何いってやがる！」

覚は普段言わないような口調で紫に怒鳴り口調で言う。

「私は貴方なんて知らないわよ？」

(知らないと言うか……ふむ……)

覚が少し考えようとしたその時。

「まさかおめえがお袋をこんな変な状態にしたのか？」

男を見ながら蒼がそう言う……ププッ。

「なあ紫……何かこいつ勝手に勘違いしてるんだがどうすればいい？」

男は困ったように紫に話しかける。

(……ふむ)

覚は傍観している。

「言い逃れとはよお……許せねえな！ ぶっ殺す！」

「あれ、なんか知らん間に話が進んで……」

「大体元の方でも私たち空気ですから」

蒼を見ながら悟と彰人はぼそぼそと話していた。

「オラア！」

「危ないじゃないか。君は親からそんな卑怯なことをしると教わったのか？」

突然殴りかかった蒼の攻撃を男はよける。

「親父は人を惑わすやつは徹底的に潰せと言ったあ！」

蒼は怒りのまま攻撃をするがあたることはない。

「怒りのままではだめだな……明鏡止水の心でなければ……」

「明鏡止水ねえ。邪念がなく、澄み切って落ち着いた心か」

「彼はそれを会得すれば父さんは制限を解くつもりですね」

「会得できりゃね」

覚と悟と彰人は蒼の現状を見ながらそう言う。

「ふむ。筋はいいがまだまだ動きが荒いな。無駄な動作が多いぞ」

男は蒼に向かってそんなことを言っている。

（ふむ……あの男もなかなかだがな……しかし……）

覚がそう考えていると、男は蒼の足を払いその足を踏みつけて地面にたたきつけていた。

「グウウツ?!」

蒼が倒れたそうな……ププっ。

「どうすんだい？ まさかあんたらもやるんか？」

（まあ、ここは息子をやれたんだ……怒ってるいるふりして軽く戦ってやるか）

「息子がやられたのに黙っていられるほど俺は出来た人間じゃないからな」

そう言っつて覚は戦闘態勢に入る。

（本気を出す必要は……なかるう）

「そうか。ならば来い……相手をしてやる」

（……）

先に動いたのは男だった。

男は覚に一直線に向かって行き、殴り掛かるうとする。

「ウオオオオオ！」

「……甘いな」

覚はよけて攻撃を仕掛ける。

「残念だが詰めが甘いのはそっちだ。オープンゲット！」

「分離も可能か。せこい奴だ」

「セコくはない。これはただの戦術だ。チエエエンジゲッタアアアアスリイイイ！」

男は変身し、黄色いロボットになる。

「ゲッターアアアアム！」

「むっ！ 伸びる腕かつ！」

男の伸びた腕は覚に絡まりつく。

「これで動けまい」

「舐めくされ！」

覚は力の如くゲッターアームを引きはがす。

「まさか俺のゲッターアームの拘束を引き剥がすとは……」

「なかなかやるな。今度はこちらの番だ！」

そして覚は男に攻撃を仕掛ける。

「ぬ！ぐうううがああああ！」

「あのゲッターとか言う奴……不思議な力だね」

「また、興味の対象ですか？」

「まあ見たことないし、なんかすごいしね」

覚と男の対決を二人はまじまじと見ている。

『多分あれが武を極めし者が辿り着く場所なんスかね』

「武を極めてもあんなのになれるとは思えません」

「だよ〜」

えるな……)

覚の悩みの種が再び増えた。

「貴方達が戦っている間に境界を調べてみたのだけれど………貴方達四人はこことは違う世界の住人だと分かったわ」

「やはりな」

「やはりね、私に境界が弄れなかったもの」

「人間と妖怪からかけ離れているからな………俺たちは」

そう言つて覚は少し顔を下に向ける。

「まあ取りあえずは貴方達を元の世界に戻すわね。それ用の術式も用意したわ」

「ありがたいな。まあ、君との勝負も悪くはなかったよ」

覚は男にそう言った。

「じゃあ、さらばだ。炎歌！ フォームチェンジ！」

『はいはい。こうやってこういうときだけ呼ばれるんスよね』

そう言つて大きくなった炎歌の上に全員が乗る。

「去らばだ。強き者よ。お前との戦いは忘れない」

「何いきなりその喋り方……まあいい。そいやあ、お前の名前………聞いてなかったな」

「俺の名は流凌駕だ」

「そうか。俺は東龍覚。じゃあな………またあつかもしれねえぜ」

そして覚達は式の背に乗り、紫の術式によって出てきた紫色のゲ-

トに入っ
ていった。

【元の場所】

「さて、戻ってきたな」

「時間はあんまり進んでないみたいだね」

覚と悟は周りを見ている。

「じゃあ料理の準備と行きますか」

「帰ってきたばっかだっ
て言うのに……めんどくせ……」

そう言っ
て二人は料理の準備に向かった。

「なんかすごい一日だったけど」

「ああ、おもしれえ奴だったよ……ふふ」

(これで技のレパートリーも増えるな……)

覚は不敵に笑った。

そうして一日は過ぎ
ていく……

続く？

え、続く？

いや、朱雀幻想記は続くよ。

『しかし俺っちの出番……』

終わり

『ちよ、ちよっと……』

ほんとに終わり。

コラボ（17・6話） ユニコーンデストロイさんとのコラボをこちら側視点から

どうでしたでしょうか。

ユニコーンデストロイさんのところと見比べるとどうでしょうか。

まあとにかくにも作者流に料理してしまいました。

しかしコラボは楽しいなあ

コラボ（東方ゲッター録と朱雀幻想記）外伝　悟編とのコラボ（前書き）

パラレル扱いかちゃんとしたことになるかは不明。

ユニコーンデストロイさんが書いたものをこちら視点で書きなおしたものです。

言葉遣いや内容が少し変わっているなどは前回と同じです。

「なんでこんな状況になってるんだ？」

「わかんにゃいよ、悟」

悟は管理局員に追われていた。

「僕はあの空間で聞こえた父さんの声の聞こえたほうに手を伸ばしたはず……」

「にゃのにゃんで管理局員に追われてるの〜！」

「そもそも僕の顔を知っている管理局員ってなんなんだ！ あそこはプレ……いや、屑が仕掛けた仕掛けで何もなかったはずだ」

（そもそもあの場所は黒い空間に包まれて出ることにも入ることにもできないはずだろ！）

悟の顔は怒りながら困惑しているという複雑な表情となっていた。

「そもそもっ！ やつと父さんの元に帰られると思ったのに！」

「にゃー悟はいつもいつもお父さんにゃ〜」

「父さんこそ僕の生きる意味さ！ とりあえず飛ぶぞ！」

「僕も生きる意味に入れてほしいにゃ〜」

そう言っつて悟は真央を背中に背負い空に飛ぶ。

「このあたりの地形は見たことがある地形に似ているが……違う世界と言っつことも考えられる」

「そもそも悟の考えだとはやて達の世界は悟の世界の並行世界ってやつなんだよね」

「そう。父さんが言っつた……可能性の一つの世界……それが並行

世界……」

そう言っただけを見回す……

「管理局員もここまで飛んでこれないようだ……しかしこの高さだと長くはいられない……さて、どうするか……まだ層との戦いから力が回復していない……」

「と言うかここ息が苦しいんにやけど……」

「だから長くはいられないんだ……ああ、そうか……君はさらに体が子供だからね。こりゃやばいね」

「一応普通よりは頑丈にやんだけど……ってどんどん下にゆっくり落ちてにやい？」

そう、悟たちはまっすぐ下に落ちている。

「あ、やっぱりそんなに持たないか」

「そんな軽いノリにやの！？　今やばい状況じゃにやいの！？」

「はっはっは。父さんが言う神を凌駕する朱雀の力も僕はうまく扱えてないということだ」

「笑ってる場合じゃないにや……うにやっ！」

悟が笑った瞬間真央は肩から手を離してしまった！

「！？　真央！」

《ザザッ》

「管理局員！？　真央を狙って！？」

どこにいたのか分からない管理局員が真央に狙いを定めていた。

(くそっ！ あの屑のせいで力がっ！ 真央っ！！)

悟はとにかく管理局員に近づく。

「真央ー！」

《ドクン》

「!?!」

目の前で何かが起きた……

管理局員が吹き飛ばされたのだ……

言葉どおりに……

「神をも超える朱雀の力を凌駕するとか言ってたら凌駕が出てきたよ……しかし……」

悟は震えていた……あの凌駕は以前の凌駕とは違う。

「ふ、ふふふ……面白いじゃないか！」

悟は笑顔で笑っていた……悟の悪い癖が出たのだ……

恐怖しているはずなのに興味を持ったものは調べたくなる……それが悟の悪い癖だ。

「寄って集って少女に牙を向けるお前ら監理局を俺は許さない。チエエエエンジン！ゲッターアアアアアワンソン！スウィッチオオオオオンアアアアア！」

流凌駕の体が変わる。
真っ黒な身体に……

「ふ、ふふふ……なんだあれ！　なんだあれ！！　すごいよ！　すごいよ！！」

悟は笑顔で喜んでいる。

「真央は凌駕に助けられたか……そう……ちゃんと接触している……ふふふ……」

悟はさらに笑顔になる。

「しかしやつの間……ふむ……」

悟の目の前では凌駕による管理局員を使った実験が行われている。

「ふ、ふふふ……面白いよ……さすがだよ……」

「悟嬉しそうだね」

「ふ、ふふ……接触してくるつさま」

「データは用意できたよ」

そう言いながら真央は悟の背中に抱きつく。

「にゅふふ〜いざというときはあの力を使ってあいつら撃退しよう
と思ったけど」

「いや、まだ一度もしたことがない物を試すのはリスクが多い」

「そうにやんだと思うけどね」

そう二人が言っているうちにも目の前で凌駕による管理局員を使ったショーが展開される。

「ふ、ふふ……何だあれ……何なんだろうねあれ!？」

「子供みたいに喜んでるにやあ」

「いや、あれは実に興味深い……」

悟は笑顔で子供のように目の前で展開されるショーを喜んで見ている。

「クハハハ。バカな奴らめ。消える。スパイラル……ダークネスゲッタービーム!」

目の前のショーも管理局員の消滅で幕を閉じた……

「ふむ……もう一人もいないみたいだな」

凌駕があたりを見回している。

「ふふ……流凌駕、だったね」

「そうだけ。次元を越えた者よ」

(こんな喋り方の奴だったか? いや、そもそも……)

そう言って少し顔をしかめるがすぐに顔を戻す。

「いや、とにかくにもかくにも……真央を助けてくれてありがとう。後、

僕の名前は東龍 悟」

「俺も改めて……流凌駕だよろしく。俺も実験がてらこの力を……
アンチ・ゲッター線の力を試してみたかったからな」

（研究ね……）

悟は凌駕に見えないように少し笑う。

「そのアンチ・ゲッター線と言う力……多用しすぎると危険な代物
だと分かる……」

「分かるのか？」

（見てわからないわけないだろう……）

悟は少し困った顔になる。

「まあ、いろいろな物の集合体であろう凌駕だからこそ扱えている
んだろう」

苦笑いしながら悟はそういう。

「確かにな。俺は妖怪であり、神であり、機械でもあるからな」

悟の言葉に対して凌駕はそう返してきた。

（……神？ そうか……神だったかこいつ……）

悟は不意に覚の言葉が頭に響き少しいやな顔をした。

「それのお陰ってわけなんだね……」

悟の言葉の音は少し低い。

「だな。そういえば悟はすぐに元の世界に戻らなくても大丈夫かい？」

「そう言われても、そもそもここに来た方法もよくわかって……ん？」

体が突然透明になりだしたのを感じる。

(さ……悟……)

(父さんの声？ そうか、ここに来た理由は……)

悟は少し笑った。

「それじゃあ迎えが来たのでこれで」

「またにや〜」

「気いつけて帰れよ」

その言葉とともにその場から悟と真央の姿は消えた。

コロボ編2 おしまい。

コラボ（東方ゲッター録と朱雀幻想記）外伝（悟編とのコラボ）（後書き）

感想増えないな

IF編 ハロウィン特別編 その式(前書き)

続かないとか言っておきながら去年の続き

IF編 ハロウィン特別編 その貳

「ハロウィンだよ」

「一年たつのはやいなあ」

そんなこんなで覚達はお菓子を求め屋敷から外へと飛び出した。

「いい月日だね」

「ね」

赤くはない黄色にい駆る月を見ながら二人は空を飛ぶ。

「と言っても作者はネタがあるわけでもないんだよね……」

「何言ってるの？」

「気にしないでいいよフランちゃん」

そう言いながらお菓子を求め二人は飛ぶ……

【博麗神社】

「ここにいたかレミリア」

「あら、お兄様。なぜここに？ それにフランまで」

「おかしくねなきやいたずらするぞ」

「ああ、ハロウィンと言う奴ね」

納得したレミリアはうんうんと頭を上下させる。

「と言われてもここにはお菓子なんて煎餅くらいしかないわよ」

「そうなのか霊夢」

「神社に来て西洋風なものがあるわけないわよ」

現れたのは神社の巫女、霊夢である。

「まあ、行くあてがなくてここにやってきた感じだしなあ……」

「じゃあ次はどこに……」

「とりあえず永琳のところにも行きますか」

そう言って二人は博麗神社を後にした。

多分来年に続く。

IF編 いい夫婦の日編 弐(前書き)

続いたけど続いてない感じですよ。

IF編 いい夫婦の日編 貳

「いい夫婦の日」

「と言つてもネタがあるわけじゃないんじゃないかのお」

彰人と水菜は夫婦の日なので旅行に来ていた。

「と言つかわしらので出る外伝一話でとまっとるぞ……」

「作者さんが引越した時に弟にP S 2を渡したら自分のものにして返してくれないんですよ」

360すらも所持権を取られている。

「新型のP S 3は2のソフトができないんだ……」

「エクストラが中途半端に攻略中じゃと言つのにのお」

完全な作者の都合である。

「とまあとにかく夫婦で旅行ですよ」

「そうじゃのお〜幻想郷の外にはあまり出ぬようになってたしのお〜」

そう言つて二人は旅行に向かった。

続く……

『もう続くなんすか!?!』

続く

『え、無視すか!?!』

続け

お正月のご挨拶+

「「「あけましておめでとう」「」「」
「と言っても本編は一向に進んでないがな……」

メタな話である。

「しかしだな、お正月と言っても作者さん忙しくてネタがないんだ
……」

「生存報告にしか役立たないわけだね？」

「その通りだ！」

と言うかコメントだけでは誰が誰かもよくわからない。

「たしかにな……これも書き方によるものだ」

「「」の最後に。を付けるのはライトノベル的によくはないんだけど
結構な人がつけてたりするしね」

「ノノで顔を赤らめさせているのも同じだな」

「side とかかいて別の視点とか書くのもそれに含まれま
すね」

「と、この説明の口調なら誰が誰なのかよくわかる。「」の前に名
前を付ける必要もないわけだ」

と、突然の作者さんの書き方説明講座であつた。

まあともかく今年もよろしく！

『オレっちの出番はないっすね……ないっすかー！』

·-∧CUNH

お正月のご挨拶 + (後書き)

まあ書き方は人それぞれですがね……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3615i/>

朱雀幻想記 ~流~

2012年1月1日01時45分発行